

衛令に「凡兵衛衛士上番。皆須檢點正身。然後奏聞」と續日本紀五に「見其正身准式」卅に「名簿雖編本貫。正身不得入市」萬葉集十六に「正身不來。徒贈裏物」などの類いと多し。但其云る中には、俗に身體と云意なるもあり。故實字を多く用り。景行紀に「實則神人」孝德紀に「驗僧尼云々之實」などあるが如し。其つやきに因て分べき也。

○ほんのうくのう 煩惱苦惱 清少納言、枕草子云「ともなるをのこわらはなど、おのゝえもくちぬべきなめりと、むづかしがれば、ながやかにうちながめて、みそかにとおもひていふらめど、あなわびし、ばんなくなうかな。いまは夜中にはなりぬらむなどいひたる」とあり。これそのころのことをわざるべし。

○煩惱はくびにのる 増鏡云「ばんなくびにのる。さかづきは花にのるとはやして、法皇の御むかひにまゐる」とあり。これ其ころのことをわざるべし。項の准みたる所をほんのくばといふは、くばみの窪といふ言の上略歟。そは頸といふは、人の身體の中ににして、くびれたる所故に、名となれるなるべし、さらば、くびれたるは、くばみ

にて、又其くばみの中のくばみたる所のよしにやらん。續世繼に、うなじのくばみといへる、此ほんのくばの事と聞ゆ。

○ほんのこ うなじ 和名抄云「項。陸詞云。項胡請和名字奈之。頸後也」とあり。此頸後の窪む所をば、俗にほんのくばと云は、頸の窪の義。其窪む所を宇奈之と云は、畝筋の意也。左右に畝筋たちて其中くばめば也。

○本來面目 傳燈錄云「道明求法六祖。六祖曰。那个是明上坐本來面目」

まノ部

○まいす 賣子 今世の言にまいすとも、まいすものともいへるは賣子の吳音にて、もと佛家よりいひならはしたる言也。下學集、上賣子商僧也」と注せり。按に、佛道に身をよする者は、凡惱を除去して利欲名聞を先離れて、道を修すべきを却て佛を賣、法をあきなひて、不淨說法をつとむる濫行の僧を指て、賣子とはいひしよし也。

○まかせる 金葉集、賀、高階明賴「なはしろ

の水はいなゐに、まかせたり民やすげなるきみが御代哉」

○まかなふ まかなひ 類聚三代格「延暦十八年三月五日、太政官符曰。應禁皇親之祿。乞賣賤

價一事。右檢案内。太政官去延暦十六年四月廿四日。下諸國符備。自今以後、公私舉錢。宜限一年。收

半倍利。雖積年紀。不得過責者。今右大臣宣奉勅。如聞。王親或募多祿。先受少價。或設重質。貸乞賤物。苟貪目前。不顧後弊。報價之日。既過

倍。因茲所司豪民。就求利潤。好爲與借。班祿之日。濫訴繁多。自今以後。賣買祿物。不得過於半倍之利。如有違犯。依法科處。」しのびね物語、

上「御だいなどは、うへの手づからまかなかうにしてす。め給へども」空穂物語、藤原の君、卅四「裳からぎぬきたる人まかひす」(猶「まかひ」)を參照せよ。)

○まがり 拘なり。徒然草「久我の相國は殿上にて水をめしけるに、主殿司かはらけをたてまつりければ、まがりをまぬらせよとて、まがりしてぞめしける」拾遺集、物名まがり「かすみわけいまかりか

にして水をめしけるに、主殿司かはらけをたてまつりければ、まがりをまぬらせよとて、まがりしてぞめしける」拾遺集、物名まがり「かすみわけいまかりか

べるものならば秋くるまでは戀やわたらん」夢相國師百首「奥山のあら木のまがりそのまゝにうるしつけねばはげいろもなし」

○まがりき 曲り木 惠慶法師集「わざとこそくりはなつめれまがりにはひまつはるゝあをつゝらかな」

○まかりなる まかりを助辭にいへり。千載集神祇「そののちなむ禰宜にまかりなりにける」拾遺哀傷、中納言敦忠「まかりかくれて後云々」同「右兵佐のぶかたまかりかくれにけるに」

○まがりもち 新撰字鏡に「餌万我利餅」また

「饌飴万加利」

○まさる 龜 萬葉集三十「憶良らは今はまからん」五十三「唐の遠き境に遣はされまかりいませ」

六二十「汝らがかくまかりなば」九三十一「今だにも國にまかりて」

○まさそめ 夫木抄、六、春、源仲正「ふぢ波のよらはれぬればむらさきのまさぞめきたるまつか

とぞみる」

○まきちらしたる如く 空穂物語、祭文「殿の
おほん車ども、のしらる、しだともたてつゝ、四位五
位まきちらしたるごとたり」

○まきもの 卷物 拾玉異本「らのへうしや
さしくみゆるまきもの、下繪にも猶秋の花こそ」し
のびね物語、上「人々あつまりて、ゑにやあらんと
まきもの見居たり」

○まきよせる 夫木抄、十二、秋、寂蓮法師「初
雁のかく玉章をまきよせてほのかにみするむらくも
のそら」

○まきゑ 薄繪 竹取物語「うるしをぬりま
きゑして」金葉集、雜上、輔弘「玉くしげふたみの
浦のかひしげみまきゑにみゆる松のむらだち」伊勢

物語に「あをきこけをきざみて、まきゑのかたにこ
のうたをつけてたてまつりける」落窓物語、一の下
「今世の時繪こそさらにせねとてかき撫給へば」云
々。

○まくはうり 真桑瓜 御湯殿の上の日記に
「天正三年六月廿九日、信長より美濃の真桑と申す

名所の瓜とて、二籠しん上」とあり。眞桑村は本巣郡
也。

○まくらがみ 枕上 金葉集、雜、上「枕が
みにしらぬ人のたちて」保憲女集「まくらがみにお
もしろきもみぢを人のおいたりければ」同、下「枕
がみに僧の立てよみかけたる歌」枕冊子廿段「枕上
のかたに」「枕上なる肩を」

○まくらばこ 枕箱 拾遺集、雜、賀「成房
朝臣法師に云々。枕箱を取につかはしたりければ」
○枕をかはす 拾遺集、雜、賀、藤原義孝「つ
らからば人にかたらんしきたへのまくらかはしてひ
とよねにきと」

○まくりで 六帖、五、紅「いかにして戀をか
くさんくれなゐのやしほの衣まくり手にして」後拾
遺集、秋、上、良選法師「袖ふれば露こぼれけり秋
の野はまくりでてぞゆくべかりける」袋草紙三、
廿云「住吉神主國基良選が歌ヲ難ジテ云、マクリデ
ト云詞ヤハアル」良選云「やしほの衣まくりでにし
て、如何」國基云「僻事也。紅ニハマフリテト云事
アリ。夫ヲ書誤也」良選暫按、又云「風越の峯より

おる、賤のをのきそのあさぎぬまくりでにして」ト
侍ルハ是モマフリデヲ誤歎ト云。國基閉口」又曰、
或人問云「まくり手といふことは、いつばかりより
よみそめ侍るにか」答云「いやしささまなる詞なが
ら、撰集には後拾遺より見えたり。堀川院初度百首
不會戀、大江良房「まくり手の袖にも戀のかくれぬ
は涙の色のしるきなりけり」拾玉集、四、雪「外山
にはしぐれにぬる、まくり手の嶺には雪をはらひわ
ぶらん」同、賀茂法樂六首、春「こえくらす花のふ
いきの春の山にまくり手なせず志賀のさと人」夫木
集、六、家集、春歌、權中納言長方「紅のやしほの
岡の岩つゝじこや山姫のまくり手のそで」同、八、
家集、寄百合花戀、源仲正「人しれず下葉のくすの
まくり手にいざとりつかん姫百合の花」

○まぐる 「ころす」を見よ。

○まげじたましひ 源氏物語、玉かづら「まげ
じだましひにいかりなせば」同、あげまき「まげじ
だましひにやと」

○まご ひこ 孫 曾孫 古事記傳十四
四十五に云「孫は和名抄に爾雅云、子之子爲孫。曾孫無
の名なり。ま子も間子に一代間を置るよし也。此孫

万古、一云比古、ある中に比古と云ぞ正しかるべき
孫字、古くは皆比古と訓り。又曾孫を比々古と云も
比古の子と云意なれば也。今俗に、曾孫を比古と云
は、比々古の訛れるなり。さて孫を無万古とあるは
馬梅などを後には卒万卒米と云例にて、本は字万
古なり。そは蕃息子にて、子等の又子等の、つき。
あり。今接に、比古は一代隔てたる子のよしにて、
隔子の義なるべければ、万古も間子の義ときゆ。
卒は生歟。又發語にても有べし。古ヘ御孫命など申
せば、もとより古言也。又云、今世に、まごひこと
いふはつゝやはたちといふ類にて、孫をまごとも、
ひことも云を重ねたる詞なるを、孫曾孫と覺えたる
は、後世の誤なり。曾孫は、ひ、子といへり。和名
抄に「爾雅云。孫之子爲曾孫。和名比々古」字鏡に
も曾孫比々古とあり。凡て物を隔つるを比と云。孫
は一重隔たる子なり。曾孫は又一重隔たる子なり。
目騒を比と云も此意なり。水の水も一重隔つるよし
の名なり。ま子も間子に一代間を置るよし也。此孫

○まご 馬子 西宮記に「馬子六人、また馬と紛るゝ故にまをむに轉じていふ也。皇孫を美孫と申せるにて、眞孫なる事を知るべし。

子四人など見えたり。馬につきたる者なり。梶子、
船子などの類也。

「おま」とのちり 夫木抄、十六、冬、西行上人

○まいもうま 下總國葛飾郡幸手領邊にて、七
になりぬとおもへば

月七日二星を祭るに、眞菰にて馬を作りて、手向る
わざあり。是いにしへのちまき馬のなごり也。散木

集第十連歌に「ちまき馬はくびからきはぞにたりけ
る」「おうりの牛はひきちからなし」著聞集、卷十九
草木部云泰覺法印、五月五日人の許へあやめをつ
かはすとて、よみ侍りける「わりなくぞあやめのふ
ちを心さすちまき馬をや引出すとて」漢土にも五月
五日艾にてちひさき虎を作りて、頭にいたゞく事あ
り。それを艾虎といへり。漢曆にあまた見えたり。
○まさかのとき　　今の言にまさかの時の用意、
まさかの時には御用にもたん、などいふは、萬葉

山こゆるこゝろの人しぐれのかな」同一秋の野のちぐ
さの花は女郎花、まじりておれる錦なりけり」寛平御
時后宮歌合「駒なべてめも春ののにまじりなむ若菜
摘つる人は有やと」古今集、春下、素性法師「いざ
けふは春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花のか
げかば」同、物名、平あつゆき「郭公みねの雲にや
まじりにしありとはきけど見るよしもなき」
○またき 全 新古今集、雜、下、遍昭「さ
がにの空にすがくもおなじことまたきやどにもい

○またげる　宇治拾遺、一八「善男夢に見るやう、西大寺と東大寺とをまたげて立ちたりと見て、妻の女にこのよしをかたる」

○またゝく　夫木抄、十九、雜、定家「おきをあめるこやのかりねのたゞ一晩かせにまたゝくよひのともしび」

○またばえ　ゐなかにて次男三男の子どもを又ばえといふは、木のひこばえになづらへていふ也。中務集『櫻のまたばえしたる枝につけて「春過て秋はまだこぬほどなれば花かもみぢかえこそみわか

集によめるまさか也。十二十六「まさかは君によりにしものを」又十七「いつのまさかも常わすらえず」十四「わが戀はまさかもかなし」又十三「まさかし善かば十八十八「今のまさかをうるはしみすれ」又二十九「まさかこそ人めを多み」などよめる、皆さしあたりたる當座の事也。今の世に云も、當時の意にて、當ときを指て云なれば、終におなじこと也。

○まさに、本居翁云豈ト云意也。藤原基俊家集下「今日まさに泪にくれてとはむとはかものかねてもおもはざりきや」落窓物語、四、廿七「人はまさにしらじや」榮花物語花山「まさにわろうおはしまさんやは」竹取物語「まさに世にすみ給はん人のうけ玉はり給はでありなんや」

○まさむね 正宗 刀鍛冶に、正宗と云名人七人ありといふ。いづれも銳利を宗としたる名也。

神代紀一書に「其断玉ヘルヲ蛇劔號曰アサハノタチササギ蛇之麤正此今在ニ
石上也」

○まじる 紀貫之集「春霞立まじりつゝいなり
七人ありといふ。いづれも銳利を宗としたる名也。
神代紀一書に「其斷玉蛇劍號曰アラチノタマササギ正此今在ニ
石上也」

○まだら 萬葉集、七四丁「まだらの衣すらんと思ひて」又「まだら衣着がほしか」二十「住吉の棟すりつけしまだらの衣」九丁「今造るまだらの衣」十四四「きべ人のまだらふすま」安法法師集『しら菊のまがきのうちに咲みだれたるをみて「おほぞらにこめたる菊のまがきかもほし、まだらにて花のみゆるは」實方朝臣集「まへかたのまだらま、なるゆきみればしりへの山をおもひやらるゝ」伊勢物語に『ふじの山を見ればさ月のつごもりに雪いとしろうあれり「時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこ、まだらに雪のふるらん』此まだらを梵語也といふ説多けれど雪をばだらともほどろとも云にあはするに、間波太禮の波の省れるにて、間をおきて散きたるをいふ詞也。委しき事は、鐘の響、中巻六丁はだれ雪の下に云へるを見て知るべし。

也。空穂物語藤原の君、丁五「四町のとのをはらひとつをばまちに住せたてまつり給ふ」空穂物語、藤原の君「四町の所をよつにわかつて町ひとつに、ひはだのおとゞ、らうわた殿、くらいたやなど、いと多くたてたる」空穂物語、藤原の君、丁六「所々をたびつゝ、御厩にし、みくらまち、政所にし」同十六又同丁、又十七丁。

○まちあしだ 町足駄 拾玉集、四「にないもつざうきのいれこ町あしだよを行道の物とこそみれ

○鹿木 待木 夫木抄、十三、秋源仲正「ますらをの鹿木のかげもあらはれてしのぶくまなき秋のよの月」爲忠後百首、賴政「ますらをの鹿木の下にたつ鹿をまたくにみするよはの月影」「山まつが鹿木の影やひまもなき居待の月のいですざりける」今昔廿七廿二條「待ト云事ヲナムシケル。ソレハ高木ノ股ニ様様ニ木ヲ結テ、ソレニ居テ鹿ノ來テ其下ニ有ルヲ待テ射ルナリケリ」○まちくだり 拾玉集、四「町ぐだりよろばり行てよをみればものゝことわり皆しられけり」

に」拾遺集、物名「すみよしのをかの、松かささしつれば雨はふるともいなみのはきじ」夫木抄、卅二、「雜、よみ人しらず「ぬれつゝも雨にはゆかんまつかさはちとせの春をちらさゝらなん」○まつさきに 賴政卿集「さそひつる人にも告げで先さきに立田の山のもみぢ葉をみん」○まつせ 末世 後漢書五十三杜喬傳「臣聞古之明君褒罰。必以功過。末世闘主誅賞各縁其私」○まつだけ 男根を松だけといふ事はやくよりの事也。宇治拾遺、一十一「松筈の大きやかなるもの、ふらしくと出きて、腹にはくと打つけたり」○松の木に杖をつかせ 赤染集、三「はつせにまうでしみちに、とまりたる家の松の木に、つゑをつかせたりしをみて「老にける我身はなに、からまし松も千とせの杖はつきけり」○松のなさけ 「あらはる、雪の下ばのふかみどり松のなさけは冬ぞ見えける」

石階松柱竹編墻」新古今集、雜、中、式子内親王「今まつのはしら」白氏文集「五架三間新草堂。○まつのはしら」夫木抄、十八、多、參議爲相卿

○まちどほ 待遠 後撰集、春、上、藤原兼輔朝臣「やどちかくうつしてうゑしかひもなく、まちどほにのみにはふ花かな」枕冊子、十、廿八「待遠にくるしく云々。夫木抄廿五、濱、惠慶法師「まちどほにみやこの人やおもふらん須磨のはまへは住よかりけり」曾根好忠集「待とほに思ひし秋は更にけりしくぞみゆる萩の下つゆ」

○まちや 町家 空穂物語、藤原の君、十七「大いどの、君すみ給ふおとゞ、町家どもおなじかすなり」

○まつかさ 都土產「松のおちばなどかきあつめて侍しなかに、まつかさといふものゝ有しを」同よみ人しらず「末の松山まつかさはきたれどもなみだにこさば又やぬれなん」同、返し、宗久「浪こそぬ袖さへぬれぬ末の松山まつかさのかげのたびねふは通せず。

○窓、なりのこす つちかべ 土壁 夫木抄三十、雜、慈鎮和尚「土かべにまどなりのこすいはまでもすさめずやどる秋のよの月」○まどをあくる 賴政卿集「東風かせの梅ふくかたに窓をあげてにはひを闇の内に入つる」○まな 真字 桜花物語「さまぐのよ「まな」といとよくかきたれば「枕冊子四〇「これがするしりがほにたどくしきまんなにかきたらんも見ぐるしなど思ひまはすほどなく」

○まなづる 相模集、いはひ「まなづるもおり」

るしかたの松原にいくその千年數をしるらん
○まなばし またいた 真魚箸、真魚板にて
真魚とは美味の極を云。

○まにあはぬ 小右記「寛和元年四月廿八日壬寅。早朝能出。寅時降誕女子。不逢產間。雖馳向。產已遂了」

○まね まねぶ 紫日記に「心ふかき人、まねのやうにはべれと云々」こは人を似せてものする事なれば、眞にせの義なるにや。にせはねと約れり。
さて應神紀に、壹岐直眞根子といふ人あり。かほかたち武内大臣にたがはず相似たり。此人大臣の難にかかる時、我かはらんといひて自ら死き。是より眞根といふよし見えたり。こは眞似の意にして、今云所とは異也。又雄略紀に、猪名部眞根といへるあり。是も本は名工を眞似ならひし故に云歟。さて物語書にまねぶといへるは、多くかなたの事をこなたへいひうつすを云れば、眞似云といふことの省かれにやあらん。是は事のついでにいふなり。

○まねきよする 信明集「天暦八年、中宮七十賀御屏風のれうの和歌なぎさの岡「和田津海のなぎ

さの岡の花すゝきまねぎぞよする沖づらし波
○まねぶ 紀貫之集「此松の名をまねばれば玉ばこの道わかるとも我はたのまん」

○まねぶ 「まね」を見よ。
○まばゆし 夫木抄、十三、秋、顯仲朝臣「くさして立るをみなへし哉」

○まばら 萬代集、春、上、土御門院御製「見渡せば松もまばらに成にけり遠山ざくらさきにけらしも」藤原爲忠朝臣集「今日ははや閨の軒ばにあやめふきてまばらにうつる朝日かけかな」詞花集、戀下「あふ事はまばらにあめるいよすだれいよ／＼人をわびさするかな」

○まはり燈籠 麟草、卷上に「祇園にかゝり河原の物みも品々にをかしかりき。揚燈まはり灯籠の軒にふらめき」

○まひなし 萬葉集、五十四に「末比波世武」六八丁に「月讀壯子幣者將爲」九三丁、十七四丁、廿四丁等

にも出で、古今集、旋頭に「まひなしにたゝ名のるべき花の名なれや」などある此麻比をまひなしとも云は、トをうらなふ、商をあきなひなど云たぐひなり即古へも、天武紀に「或捧幣以媚於其家」「多得新羅幣物」また孝德卷に「貨賂」「賄物」などあり。
○舞の袖ふる 夫木抄、卅六、雜祭主輔親「万代の舞の袖ふるやどにこそあるじたづねてもろ人もこれ」
○まへのみとほる 藤原爲忠朝臣集「照月のまへのみとほる黒雲をせきをしするてみるよしもがな」
○まゝ 菊花物語「まゝむすめ」大和物語「まゝの少將のもとに」同「まゝちの少將すみけるを」
○まゝは 繼母 落雀物語、一上「いみじき繼母といへど云々」
○まゝはゝ子をにくむ 空穗物語、俊蔭下「たゞひとり子をまゝ母にはかられて、今はおともきこえずとなんいふなる」落雀物語、一下「まゝ母の憎むはれいの事に、人もかたるたぐひ有てきく云々」

○まむし 「はみ」を見よ。
○まめなひと 雅語にて、實めいなるをいへり。今のは實言は眞實によくつとむる方より轉じたる也。古今集、二十一、俳諧「まめなれど何そはよけくかるかやの亂れてあれどあしけくもなし」後撰集、十五雜「女のあだなりといひければ、朝綱朝臣「まめなれどあだ名はたちぬたはれ島よるしら波をぬれざぬにきて」

○まめに 伊勢物語に「むかしをとこ有けり。いとまめにじちやうにて云々」今俗によく立はたらく人をまめ也といふも、實の方より轉れる也。

○豆一さや 空穗物語、藤原の君、廿七「あらしくとも人は十五人、つけ豆を一さやあてにいだすとる」

○まもりふだ 守札 明月記「文暦二年五月十一日。以實舜令問在友朝臣口舌病事。不輕由占。可修三百怪祭由。明日吉由領狀。同十二日在友朝臣以次男令修祭相逢謝之。屋四面打簡」
○まゆをひらく 忠見集「花の香をけさはいかにぞ君が爲まゆひろげたる菊の上の露」同、三丁九

月九日菊「萬代をわかゆるきくぞおく露のまゆをひらくる時はきにけり」

○まら 太秦牛祭々文に「或波鞍爪仁大閻乎詰天仁加美」(猶「ちんぼう」を参照せよ。)

○鞠のかゝり 「かゝる」を見よ。

○まり桶 「おまる」を見よ。

○まる 丸 童名某丸。小右記「寛仁三年二月十六日。千壽丸。於家侍所令加三元服。」

○まる 「かはや」を見よ。

○まるば つぶれたる刀の刃を丸刃といふことあり。源重之集「うちかへすくはのまるばにまみれつ、秋のたのみもながらぬかな」

○まるね 丸寝 萬葉集、九三十八九丁「紐とかず丸寝をすれば」十五丁、「まるね吾する長き此夜を」二十九丁「草枕たびゆくせながまるねせば」また「草枕たびの丸寝の紐たえば」

○まるば 「こがたな」を見よ。

○まゐりもの 食物 源氏物語、玉かづら「まゐり物なるべし。をしき手づからとりて」桀花物語もとのしづく「そのまゐりもの御厨子所わざにすべ

○申しわたす 「わたす」を見よ。

○まんさい 萬歳 才藏 神樂譜、千歳に「せんさい、せんさい、せんさいや、千とせの、せんさいや、まんさい、まんさいまんさいや、よろづよのまんさいや」此曲舞のはてにうたふ祝言なれば、萬歳樂、千歳樂など樂曲の名ともなり。又後世にいたりて大和三河の萬歳といふものゝ名となり來しも此曲の遺風なるべし。又曰、上方にては大和萬歳、東國にては三河萬歳とて、其國より出で春初の壽言する者あり。大和萬歳は、や、ふるく見ゆ。三河萬歳は江戸はじまりて、その國より將軍へ出そめたるよし物に記せり。此名は、千壽萬歳といふ壽言をそのまま、名に呼たる也。古本神樂次第云「天下千壽萬歳可御坐」支物聞支などいひて曲の名ともなれる也。

さて其が使ふ雜伎の者を才藏といふは、才雜の義なるべし。三代實錄に「雜伎之才」江家次第曰「侍所御神樂事云々。訖人長起召才男一頭一人殿上人云々」神樂次第云「男共令立女天各乃才可試體申多利云々」また「各の才試了奴。今八御神態可仕之状

申多利」などあるは皆俳優の戯れをする雜伎の才を云也。されば此意を以て才雜とは云そめたるなるべし。又曰、日次紀事、卷一曰「千壽萬歳大和國窪田

箸尾兩村千壽萬歳兩座大夫來所司庭爲鼓舞云々」

俳諧五節句曰「萬歳と云所大和に有。此邊より來とも云、又江戸萬歳は三河より來ると云。遠國には三

月中迄舞ありく云々」尾陽雜記、卷中曰「萬歳といひて今世にあり。ねんなひともいへり。其根元を尋る

に長母寺の領、むかしは方々にありて、此あたり味鏡といふ所をはじめ、知多郡木田大高の邊にいたる迄、所々寺領有となん。然るに味鏡に一人の鄙賤ありけり。世に過わびて、或年のくれに無住法師に参りければ、あはれみて、佛法の路をめでたく作りて、年の始にいひめぐりて、物貰ひてよすがせよと數へ玉ひしと云々。その後世にはびこり大高の邊はさらなり。今他國まで此萬歳の事多くなれり。あまりさへとなへ失ひて、あらぬかどこと申侍るとなん」とあり。又元文三年冬萬歳由緒御尋有し節、書上に寫しあり。それには「五代先松江庄吉と申者より、代々年始萬歳、江戸御取建の初より今年に至

まで、旦那衆中相勤來候」と見えたり。是には、きと異譯もあれど、事長かれば略さつ。

○饅頭饅頭並三鷹食禮 又云先づ客人座につくと

一番に饅頭餅を盆にすゑて出す。客銘々に戴きて、次第に周遍す。これは裝束の袖を押す物なり。形は

太鼓の撥やうなるものなり。今下方にては、上下を著する故に、これを用ひす。依て盆ながら載て下に置なり。さて、これを勝手へ取、其次に櫃に大葉を布、前へつり柿、向へ赤鱔を盛り出す。若精進の時

には、鱔の代りにむめばしを付るなり。箸を付て銘々に出す。客人箸を取て、鱔を食ふまねをして、つ

り柿にて箸をぬぐひ、箸ばかりを客の方へ取置なり。其後右のへぎをかつてへ引て、其跡へ饅頭を一人に

二づ、一を四わりにして汁をば副へ、向へ酸牛勞を付、膳にてするなり。汁はみその集め汁なり。さて客人汁を吸て、其實は食はざる者なり。蓋し素麵

は汁に漬してくひ、薯蕷麵は汁をかけ、饅頭は汁を吸ふ。これにて三麿の食やう能く分る事なり。一説に、向へ赤鱔、前へ乾柿、乾柿なき時には豆腐を四角に切て居る。乾柿も豆腐も食ざるなり。赤鱔と梅

干とは一口食ふなり。たとひ食すともはさみ揚て、食ふ体をして、其箸を豆腐にて拭うて居中に間のぬけぬやうに早く膳を居る事なり。饅頭は平生体の小さには非ず。大形なるなり。十文字に切て居る故に異名を十字とも云なり。四切れ五切れほど食て、かしは遣すなり。薯蘿麵は山の芋をすりて、小麥の粉どこね合して、切むぎのやうにして出すなり。拜領乃魚鳥、又云、慈照院義政公の條令に、拜領の魚鳥は亭主より食ひ始むべしとなり。膳も先へ居るとなり。此例おもしろしとて、當御代にもさやうに成されたるよし、寛明日記に見ゆ。これは寛文曆の記錄なり。さらば、願くは、亭主上坐に居て食たき事なり。坐のもやうあしくば、下坐に居るとも膳は亭主より居て、亭主より食がよし。

みノ部

○み 日讀の口に蛇ヘビをあつるは、美といふに蛇の意ある故なるべし。鼈、蛟、毒蛇の類也。

○みあはす 「めあはす」を見よ。

○みうけしやうもん 身請證文 「請申 西心

○みかた 味方 古事記、詞志比宮段に「太子御方者以三九通臣之祖難波根子建振熊命爲將軍云々」日本紀略に「天慶三年十二月十九日庚戌。土佐國言。八多郡爲海賊燒亡。合戰之間。御方人并賊類多中箭死者」とあり。傳云「後世に味方と書は由もなき非なり。常にも己が方さまの者を美加多と云。其も軍に云、御方より轉れるか。又は其は身方の意にて、本より別なるか」といへる。今按に、此事岡部氏も常にいはれたれど、さしも答むべきことにはあらず。蒲生氏郷の書に「御方は皇軍の御方ざまなれば、臣下武門に云へくもあらず。下に云は皆身方の心なれども、軍に身方と書字不吉なれば、假字以て、味方と書ならへり。猶好字あらんにや」といへり。是にてよく聞えたる事どもなるをや。

○みがまへ 夫木集、十八、源仲正「かじきはくこしの山ちの旅すらも雪にしづまぬ身をかまふとか」

○みぐし 「かうべ」を見よ。

○みくだす みおろす 野之眞木立山陽見降者

萬葉集、六十一「三芳

身代事 右一人者。右件子細者沾却、西心之養子得右女之時、買主實蓮房許にて五箇年之間に遣な請畢。其故者、五箇年之内、本錢十四貫文にて、可請身代々。雖然本人實蓮房若相交天可遂問注之由有申事。者今年之内、彼西心を相具天可返答及兩三度之間、於今買主之汰沙者存外也。依之玉王彼身代請出給之處也。但本人實蓮房若相交天可遂問注之由有申事。者今年之内、彼西心を相具天可遂一決也。仍爲後日沙汰證文注進之狀如件。建長八年丙辰卯月廿五日、白拍子玉王花押。右尾張國名護屋大須寶藏院出于大般若經裏打之反古之内云。又或北野山真福寺出于倭名鈔裏打中云。今以取田氏寫本摹之

○みおろす 「みくだす」を見よ。

○みがく 俚語に、女の化粧などし、身だしなみするを、みがくと云も、菜花物語、わかばえの卷に「はぐろめつけなど、心のどかに我身のけさうしみがくもあり」といへり。

○みおろす 「みくだす」を見よ。

○みがく 俚語に、女の化粧などし、身だしなみするを、みがくと云も、菜花物語、わかばえの卷に「はぐろめつけなど、心のどかに我身のけさうしみがくもあり」といへり。

○みつくる 竹取物語「よごとにこがねある竹を見つくる事かさなりぬ」

○みこし 御輿

して

○見越入道 輟畠錄廿九淮渦神條下「按地志云。

水神在臨淮懸龜山之下。形若獮侯。縮鼻高額。青龜

白首。金目雪牙。頸伸百尺。力踰九象云々」

○みこと 「おんこと」を見よ。

○みさご 「いさご」をみさごともいふ。初秋卷に「水をあさみ、みさごも見ゆる山川は」とよめり。水砂なり。

○みざめ 見醒 ふしき きと見る 「庭

のをしひいかにぞや。みざめせぬやうはさぶらはぬ」

源氏物語、初子「我ならざらむ人は見ざめしぬべき御有様を」家隆卿の詞に「歌はふしきの物にて候也。

きとうち見るに、おもしろくあしからずおぼえ候へども、次の日又々見候へば、ゆくし、見ざめのし候これをよしと思ひ候けるこそふしきに候へなど、おはゆる物にて候云々」

○見ざるきかざるいはざる

省心銓要云「耳不

○聞二人之非目不視二人之短口不言二人之過庶幾爲君子」

○みさを 操 貞操を美佐乎といふこと、後めきてきこゆるは、古書に、をさく見えざる故なるべけれど、ふつに見えぬにもあらず。古事記、朝倉宮段に「然汝守志待命」とある守志の二字、ミサヲニと訓む外なし。靈異記に「風三左乎」また氣調彌佐乎などあり。拾遺集雜下に「三瀬川渡る美佐袁もなかりけり云々」とよみたるは、竿を兼ていへるなり。常に操字をよむ。字書に所守也とも、持念也とも注せり。金葉集、戀上「なにせんにおもひがけりんから衣こひしき事はみさをならぬに」拾遺集雜下、菅原道雅女「みつせ川わたるみさをもなかりけりなに、ころもをぬさてかくらん」

○短き物のはしき 萬葉集、五三十飯炊 事毛和須禮提。奴延鳥乃能杼與比居爾。伊等乃伎提。短物乎。端伎流等云之如。楚取。五十戸長我許惠波。寢星度麻低來立呼比奴

○みしまごよみ 三嶋曆 梅窓筆記、上「日用工夫集」空華「應安七年三月四日浴于熱海」蓋三島曆

○みせ 見世 店 今商家の表間を見世といふは、買人への見せ口を、棚に置いて見せて賣しよ

り、名となりし也。見世を店といふも、品物どもを並べ置棚より出たる稱なり。庭訓往來に「市町者通辻子小路」令構見世棚。崔豹古今注云「店置也。所以置貨物也」猶此事店條に委しくいへり。

○みそ 味醤 味噌 三代實錄、四十九に「味醤二字」と見ゆ。和名抄にも「未醤云々。俗用味醤二字」とあり。但和名抄の未醤の説凡て心得がたし。空穗物語、藤原の君、廿九「うごまはあぶらにしばりてうるに、おほくのせに出て、そのかすみそしろへつかふによし」卅「柚みつにてまんはうす」

○みそか 後撰集、夏「たなばたはあまの川原をなゝかへりのちのみそかをみそぎにはせよ」

○みぞかは一 溝川 永久四年百首、源兼昌「ゆ

以是日爲上巳節故作詩起之」（猶「こよみ」を参照せよ。）

○みぞにをちのみぞかはまさりつ、ならぬまとまでながれきにけり」

○みそかひ 夫木抄、卅五、雜、俊頼「えのよどにみそかひひろふうなる子がたはぶれにだにとふ人もなし」

○みそしはの世話 前漢書云「咸宣爲左内史。其治米鹽之事。小大皆關其手」性理大全云「許魯齋白大而君臣。小而鹽米細事」

○みぞひめ 「あぶらしぶる」を見よ。

○みそのみそくさきはくはれす 海人藻芥云「二條良基公仰に、上臈の上らうしきと、みそのみそくさきは、下品なりと御利口あり」

○みぞしろ 「ふだちにをちのみぞかはまさりつ、ならぬまとまでながれきにけり」

○みぞの世話 前漢書云「咸宣爲左内史。其治米鹽之事。小大皆關其手」性理大全云「許魯齋白大而君臣。小而鹽米細事」

○みぞひめ 「或人問云、枕冊子六「とり所なき物みぞひめのねれたる」此みぞひめとは何をいふにか。答云、衣幅縫にて今云ひめのり也。さてひめ糊をきぬにつけてはりたるに、雨などにねれたらんは取どころなきよしにいへる也。和名抄「水縫類。幅縫。唐韻云。幅縫。偏索二音和名比女、或說云非米非粥之義也」とあり。今按に、此或説ひが事也。引米の中略にして、白にて引たる米のよし也。又これに二つあり

○みぞる 美 夫木抄、十七、冬、從二位家隆卿「かきくもりみぞる、空やるえをめて氷りもはちいふ。ひめはじめといふ、ひめ是なり。今は粉に引たるを云。委しき事はひめはじめの條にいへば省きつ。

○みだいどころ 御臺所 北方之稱なり。中原康富記云「應永廿七年九月十日丙子。室町殿云々昨日於御臺御方仰驗者被加持之處云々」

○みだて 一 爲忠後百首、中、源仲正「しほかせにをじまの櫻花させたてなみのみだてもなくてぢりぬる」

○みだてがない 夫木集、四、嶋上櫻、源仲正「鹽風に小嶋の櫻花さけどなみの見たてもなくてちきをよろばひおはするほどに云々」

○みちはし 道橋 隆信集、下「その河にい

とひろき橋をわたすと聞いて、これより「なか河の水にせかれし道橋をわたしてけりと聞ぞうれしさ」此返しにはしいてきなば、これよりのち渡らん人は心ざしあさくやといひて「けたよりもかよひやするとまつべきになに渡すらんなかの道はし」

○みちびかる 金葉集、雜、下、覺雅法師「あひがたきのりをひろめしひじりにぞうち見し人もみちびかれる」

○道をあける ね床 賴政卿集「かほりくる花橋の道をあけてしのぶね床を人にしれぬる」猶「とほる」を参照せよ。

○微塵まなこにいれば、大山も見えず 避暑錄云「一指蔽^{ハバチ}目、太山弗^{モテ}見」

○みづいろ 水色 夫木抄、十九、雜、花園太政大臣家大進「くもはれて月すみわたる夏のよはにごらざりけり水いろのそら」

○みづがめ 「かめ」を見よ。

○みづぎ 見繼 萬葉集、十三「人左倍也見不繼將有云々」此歌見とけずあらんの意也。今の

世の言に、人を見繼と云も其人を見遂るをいふなれば、もはらおなじ意也。

○みづぐそく 三真足 佛の具に三ツ具足と云物有。二條良基おとゞのかへせ給へる雲のみのりといふ物に、銀のみづ具足と見えたり

○みづくるま 水車 金葉集、雜、上、僧正行尊「はやき瀬にたぬばかりぞ水ぐるまわれもうき世にめぐるとをしれ」

○みづさき 水先 藤原爲忠朝臣集「大井川くだす筏の水さきは波もくだけて玉と散ける」

○みづた 水田 久安百首、前大納言隆季卿「かりがねのうかべるつばさ打たれてみづたのほだちふみしだくらし」

○みづたまり 水溜 空穂物語、藤原の君十六「夕ぐれに雨うちふりたるころ、なが嶋に水のたまりに、ほといふ鳥の心すごくなきたるをき、給ひて」新撰六帖、三、正三位知家卿「雨すぐるたのきのさるの水たまりありはつまじきよをやたのまん」

○水鳥くがにまよふ 一條兼良公源語祕訣云「玉かづらの巻云。たゞ水鳥のくがにまどへる心ちして」

とあり。毛詩注云「離渠、水鳥而在原失^ハ常處」あひあたれり。
○水にゑをかくがごとし 混槃經云「如^シ畫^ナ水速減^ハ不^ニ久^ニ住^ス」百喻經云「畫^ナ水爲^ス記」佛祖通載云「如^シ筆畫^ラ水」
○水の上にふる雪いさごのうへにおく露 空穗物語、只こそ「すべてわが子のためにあしからんことをば、水の上にふる雪いさごのうへにおく露とし給へと聞えおきてかくれ給ひぬ」

○水のたる、やうなり 此謡ふるきことなり。
二條良基、小嶋のすさびに云「いろ／＼の具足とも水のたるやうなるかぶとのくはがた」とあり。

○みつはくむ みつはさす 後撰集、雜三、に「藤原の奥範朝臣の云々水をもて出てよみ侍けるひかきの姫」「としふればわが黒髪もしら川のみつはくむまで老にけるかな」檜垣家集には「老はて、かしらの髪もしら川のみつはくむまでなりにけるかな」とあり。後拾遺集、雜、五「冷泉院東宮と申ける時、女の石井に水くみたるかた繪にかきたるをよめとておほせごと侍ければ、源重之「年をへてす

める清水に影見ればみつはくむまで老はれにける」此みつはくむてふ事、舊說皆わろし。さて、みつは反正天皇の御齒のうるはしく坐つるをばた、へて、瑞齒別天皇と申奉りつる如く、毛詩魯頌閼宮篇云「既多受^ス祉黃髮兒齒」とあるに因に、老人齒落盡て後に、更に如^シ小兒^{タニ}細^ク齒の生をいふ。爾雅に「齶」とある是なり。その齶の若々しくうるはしきよし也。くむは蘆の角ぐむ、芽ぐむなどいふに同じ、舊本今昔物語、卷下三十三に「美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保禰爾阿布曾宇禮志伎」これにみづはさすとよみたるにて、いよ、明らか也。さすは草木の枝葉のさすといふと同じくて、即^キ崩をいふ也。

○みつはさす 「みつはくむ」を見よ。

○みづばしり 水走 新撰六帖、一、信實朝

臣「さみだれにたきもあまりの水ばしりところもせ

○水はひきくにながる 孟子云「人性之善也。猶^シ水之就^シ下也」家語云「夫水似乎德。其流也則かぬ岩はさまかな」

○水之行避^シ高而就^シ下

臣「さみだれにたきもあまりの水ばしりところもせ

○みづまさも 「うろこぐも」を見よ。
○水も漏さぬ中 伊勢物語 下「いかでかくあふこかたみとなりにけん水もらさじとちざりしものを」夫木抄、廿四「梅つ川のせきの水ももる中と成にける身をまづぞうらむる」

○みつればかける 易象云「亢龍有悔盈不可久也」釋名曰「月缺也、滿則缺」

○身と身となる 空穂物語、俊陰「あないみじや、かゝる御身をもち給ひて云々。御身々とだになり給ひなば、おうなおひかづきてもつかうまつりなん」

○みどり 「そな」を見よ。
○みなしご 夫木抄、卅四、釋教、家隆卿「うき世にて身はみなしぐとなりはてぬわれまよはすな法のたらちね」

○みな月のてりはたゞくにも 竹取物語「霜月しはすの、ふりこほり、みな月のてりはたゞくにも、さはらすきたり」とあり。照霧と云る注よし。万葉集、十九に「光る神鳴はたをとめ」とよみたるも鳴はためく意のつけ也。下の文にも「神はおちか

るやうにひらめきかゝる」とあり。又源氏物語などに、ひたゝけてと云詞も、此はたゝきと本同語なる故に、古き注に、雷同也とは注したり。但それは夕立の晴たる跡の、すゞしくいさぎよき方より、晴やかなる意に用ひたり。

○見なほしき、なほし 神代卷、口訣云「不懼不恨者。神明以有過。見直之。聞直之謂也。」延喜式云「咎過在平波。神直佛大直備爾。見直。聞直坐氏」

○みにくい 古事記、上卷に「故爾其姉者因甚凶醜。見畏而返送云々」書紀、神武紀に「大醜此云映奈彌爾句。又古事記、中卷、玉垣宮段に「其王二柱者。因甚凶醜返送本土」

○みにならぬ 身方 世に眞實なく頼もしげなきを身にならぬといへり。後撰集、秋、下「花すきほに出やすきくなればみにならんとはたのまれなく」此歌薄によせたる戀の情にて、薄の身ならぬにはかけたれど、こなたの身に成て頼まれんする人にはあらぬよとなげく也。是を以て見れば、合戦にいふ身方をひたぶるに、俗言のやうにいふなれ

○み、たぶ み、たば 和名抄云「耳垂。辨邑立成云。耳垂和名美々太比。墮丁果反」とあり。今み、たをとも、み、たばとも云をみれば、是も髪のたわと同意の語也。たをともたばともいへば也。言の義變の條にのべたり。

○み、たば 「み、たぶ」を見よ。

○み、づか 耳塚 古ヘ源賴義朝臣、陸奥の朝敵を征伐して、其賊徒の耳を取て、京都に携へ歸りて、これを埋みて堂祠を建て、等身の阿彌陀の像を安置し玉へり。即ち今の六條坊門西洞院の西なる耳輪堂これなり。後豊臣氏の朝鮮の役に、韓人の耳を殺して取り歸りしを、京都方廣寺の境地に埋みて、耳塚と稱せられしは、此耳輪堂の例にならへるなるべし。

○み、いたつ つくば問答序「いと心にくく、くせに云々」

○み、す 虫名。和名抄云「唐韻云。螭蟻。古音蚯蚓也。本草云。蚯蚓。丘引二音和名美々須雀羽古今注云。江東謂爲歌女。或謂鳴砌。」とあり。昔より

み、すを鳴ともいひ、又無聲者ともいふなれど、如あるを見れば、よく鳴ものと知られたり。

○耳の鳴は吉事 三朝實錄太宗紀天慶九年「上

謂文館諸儒臣曰。朕憶從來、左耳鳴。必聞佳音。右耳鳴必非吉兆。今左鳴。出師諸貝勒必有捷音。

○みよりにこそ 耳を聞く 目を見る 空穂、國譲卷に「らうたしとおもひし物をしも、いたして、かかるみ、をきく事と云々」耳を聞とは、今俗に、うき目を見るなどいへるにおなじ。平家物語、二代の后の段に云「久壽の秋の始おなじ野原の露ともきえ、家をも出世をものがれたりせば、かゝる耳をはきがざらましと御歌有けり」

○みもの 見物 築花物語、月宴「めづらかなるみもの」

○みやうにち 明日 みやうねん 明年 翌日をば明日といふ。翌年をば明年と云。ひとり翌月をば明月といはざるものは、これ十五夜に混するが故なるべし。

○みやうねん 「みやうにち」を見よ。
○みやうみやうにち 明々日 小右記に「明なるみもの」

翌日をば明日といふ。翌年をば明年と云。ひとり翌月をば明月といはざるものは、これ十五夜に混するが故なるべし。

○みより羽 鷹のみより羽と云は、手に居たる時、其身の身によりたる方の羽をいふといへり。されど、左右の所は、定めがたきよしあり。ある故實の書にいへるやう「昔公家に鷹を飼給ふとき、公家は左の手にする給ひ、武家は右に居る例也」とあり。されば身よりは左右に拘はらず、其居る時わが身に

皇望 令問曰

○みを吹とほす 夫木抄、冊五、後鳥羽院「すまのあまの身を吹とほす浦かせにもしほの袖やいとくさむけき」

○身をもちにつく 後撰集、雜二、よみびと不知「かすならぬ身をもちにしてよしの山たかきなげきをおもひこりぬる」

○みをわける 後撰集、冬「身をわけて霜やおくらんあなた人のことはさへにかれもゆく哉」

むノ部

○身をすて、きほふ 萬葉集、九三下に「夏蟲乃入火之如。水門入爾船已具如久。歸香具禮」

○身をつみて人のいたさをしれ 慈鎮和尚記、慈鎮和尚歌「たれもまたわが身をつみて思ふべしいのちはをしきものとしらすや」中國軍記、武者物語、大内義隆妻歌「身をつみて人のいたさぞしられけりこひしきときは戀しかるらむ」

○みをなげる 古今集、詐譜「世の中のうきたびごとに身をなげばふかきたにこそあさくなりな

タ日」と、ところなくに見えた。明後日の事也。

○みやづかへ 仕官 又仕官と音語もてもいへり。前漢書五十八ト式傳「自少牧羊。不習仕官不願也」

○みやめぐり 中務内侍日記「かすかに參りつきて、みやめぐりすれば」夫木、廿三、光俊「ぬへのをの云々」左註「此歌は康元々年十一月五日鹿嶋社詣で次宮めぐり侍るに」

○みやる 今のはらいへば、雅言ならじとおもふやうなれど、熱田社、寛平緣起、倭建命の御歌に「奈留良乎。美也禮止保志云々」萬葉集、十三丁に「吾者見將遣。君之當波」古事記、明宮段に「望ニ其嚴飭之處」古事記、朝倉宮段に「爾天皇望 令問曰」

○みより羽 鷹のみより羽と云は、手に居たる時、其身の身によりたる方の羽をいふといへり。されど、左右の所は、定めがたきよしあり。ある故實の書にいへるやう「昔公家に鷹を飼給ふとき、公家は左の手にする給ひ、武家は右に居る例也」とあり。されば身よりは左右に拘はらず、其居る時わが身に

これ向ひ代るの略語にや。今の阿蘭陀人が、一季代

りに長崎へ人質に來て入れ代るの類を、むかはりといふべきか。日本紀卷二十三「百濟國王義慈。入王子豐章爲^{ムカハリ}質」此質の字にむかはりと訓せり。又器財を寄て、錢貨を借るなどの質も、ちの音に呼べし。しつの音に呼ぶはあし。

○むかひつぶて 新撰六帖、二、信質「うなぬ
子のうちたれがみをふりわけてむかひつぶての袖か
ざすなり」

○むかひびつくる 向ひ火つくる 火退
古事記、中巻、日代宮段に、倭建命の焼津の野火の條に「以ニ其火打ニ而打出火^ヲ著ニ向火^ニ而燒退^テ還出^ス。とある故事より出たるなり。記傳云「向火とは彼方より燒來る火に向ひて、又此方よりも火を著て燒を云、かくすれば彼方の火の勢弱りて、負るなり」源氏物語、真木柱の巻に「此みけしきもにくげに、ふすべ恨みなどし給は^レ、中々ことつけて、我も向火つくりてあるべきを」(河海抄に、日本紀第七云云云。たとへば人の腹立べき事を、こなたよりも相對して、腹立することを云なり)又竹川の巻に「いとうしろめたき御心なりけりと、むかひ火つくれば」

上人「うなるこがすさみにならすむぎぶえの聲にお
どろく夏のひるぶし」

二「みつあしのだい、うらぐろのつきしらしに、むぎのおものませたり」

などいふに同じ。今俗に前世のむくいなどのみ云。
おもふに佛説の因果を聞きなれたる心ぐせ也。土佐

うへに、空穂、俊蔵に「東國よりみやこにかたきもたる人むくいせんとおもひて、四五百人の兵にて云々大和物語に「御はかししばしかし給はらん、ね

たきものゝむくいしはべらん」など有がごとし。
○むくいぬ　　むくどり　　むくいぬは空穂物語
菊宴に「じじゆうの角をれたる牛のたぐひなりや。」

中將うちわらひて、むくいぬのあひだの耳のやうに
て「云々」和名抄に「唐音云。獵^{タク}深毛犬也。和名無久
介以沼」とあり。名義は純毛犬のよし也。或書に是
を、鳥の雛の雛^{ブク}稚を引きて、ふけ毛いぬ也といひた
れど、かの雛稚は鳥の雛の卵われて始て出たる時の

(花鳥)餘情に、火の付たるに此方より又火を付れば向ひの火は必消るを向火と云ふ。其如く人の腹を立てるに、此方より又腹を立かくれば、人の腹はたてやむなり)などあるは、此故事に依りて、人の腹立る時に、此方よりも同く腹立て向ふを、向火とは云ひならへるなり。又和名抄に「野火。字統曰。燐防_{ハシマヘ}野火也。又作_レ燹野人説云_ニ保曾介_{ハシマヘ}孫惱切韻云_ニ燹逆燒也_{ハシマヘキナタ}」とあり。保曾介は火退の意なれば向火なり。
逆燒て彼方の火を退くる意なればなり。

○むかふすね 向脚 足の脛の前を今むかふすねと云は、古く向股といへる向に似たり。式祝詞に「手肱爾。水沫畫垂。向股爾。泥畫寄氏。取將作奥都御歲乎」など多く見えたり。

○むぎのあき 賀茂保憲女集「冬をへてともしうおふるむぎの秋」林葉集、二「はたけふは、麥の秋、風吹たちぬはやうちとけね山ほとゝぎす」遊糸日記卷末附錄歌「せみおくるといふせみの初聲聞よりぞ今かとむぎの秋をしりぬる」曾丹集「五月蟬聲送麥

○むぎぶえ
一麥笛
夫木抄、舟五、雜、西行

生毛の事にて、おのづから吹出たる細き毛をいふな
ると。猿は年々生えかはりて生毛にはあらず。一身
ふくよかにして毛の多く長く盛なるをもて、純毛犬
とはいふにこそあれ。むくとは萬葉二に「水つたふ
いそのうらみの岩つゝじ木丘開道乎またも見めか
も」此木丘は借字にて、躰躅の盛には芝原なども咲
うづみて、ひたぶるに花になるといふ也。又續紀、
九、詔詞に「佐太加爾。牟俱佐加爾」又十五詔詞に
「年實豐爾。牟俱佐加爾」などあるも、純榮の意に
て、欠たる事なく、ひたすらにさかゆるよし也。是
らをいかで稚穢よりいふとせん。凡彼書には、白む
く、銀むく、又ふくよか、ふくたむ、ふくたの類を
悉くふく毛よりいふとして、今此むく鳥をも、むく
たみたる鳥也といへど、むくどりは群木鳥の義也。
彼鳥常にも一つ二つは飛ばぬものにて、必ずあまた
群て飛ぶのみならず、其わたり来る時も、數千群れ
て来る故に云にこそあれ。此外其いへる所悉くひが
事なれど、こゝに用なき事は省きぬ。

名抄、上「これはむくのはみがきして、鼻あぶらひける御歌也」榮花物語、疑「とくさむくのはなどして、四五百人てごとになみてみがきのごふ」

○むくむく 虫などのむくくうごくといふむくは、古事記、上卷に「匍匐委蛇」神代紀に「透蛇」空穂物語、樓上に「逃げて仆れもこよひつゝいけば云々」源氏物語、葵に「おとゝはえ立もあがり給はず。かゝる齡の末に若くさかりの子におくれ奉りてもこよふ事と恥泣き給ふ」などあるも、この活きたる也。

○むくろもち 新撰字鏡に「蛟糞鼠也。牟久呂毛知」

○むげ 枕冊子、十二、十三「ちかへ君とほつあふみの神かけてむげにはまなのはしみざりきや」拾遺、物名、よみんしらす「わすれにし人のさらにも懸しきかむげにこじとは思ふものから」僻案抄「むげと云詞、歌によまねど、隱題のならひ、みぐるしき事どもあれば、只の歌にはよむべからず」大和物語「むげにさて過し奉りてんやとてかへらせ給ふ」

○むこ 催馬樂「我家におほきみきませむこに

せん 和名抄云「堦は爾雅云。女子之夫爲堦。作せん」和名無古」

此むごいといふ詞を考る

に、萬葉五七丁に「父母を見ればたふとし妻子見れ

ば米具斯宇都久志」又十八廿六丁に「妻子見波可奈之

久米具之」などある米具斯を活したるにて、則、牟期

使を音便にむごいとはいへる也。米具と牟期と音も

通ひ、其意も全ら同じかるもてしるべし。又此むご

きを一轉して、むごつたいとも云を、法語めかして

むさんといひなし、ならん。むざむざ殺すなどいふ

をも合はすべし。大秦牛祭祭文に「無懺之奴原仁於天波」と見え、軍書謠曲等にも「無懺也」といひて、

むごい事やといふ意につかへり萬葉十一十九に「人のなきぶりにし里にある人を愍久也君が戀にしらせん」とある、此歌もむごやといふ意にして、愍字を

當たるは憐愍といふも猶一つねざしの言なるべし。

俱舍論根品頃疏「於諸功德及有德者。無敬無崇。無所

忌難。無所隨屬。說名無慚。即是恭敬所敵對法。爲諸

善士所訶厭法。說名爲罪。於比罪中。不見怖畏。說名

無慚乃至有餘師說。於所造罪。自觀無耻。名曰無慚。

云。今はくはじとの給ふ。いささかなる物、まうほらでひごろへぬ」

○むさます 武佐升

中國邊に、升にむさ升

といふ詞遺れり。佐々木家記錄云「天文十三甲辰年三月廿日、屋形(佐々木義實)諸將に命じて、當年より年貢等、總じて國內にて取扱ふ處の升、先規より有來る所の升に二合を減じて、新升を用ふべし。これ民を惠むの隨一なり。其外軍用に利多しとて、武佐の御藏にて下手衆究めて升をいだす。是より江州にて取扱ふ升を武佐升と云」此名の今に稀々のこれをこそ。

○むざむざ むざむざ殺すなどいふ、むざ、むざ也

既にむごいといふ條にいひつる如く、是も本と萬葉の米具斯といふより出て、むごい、むごたらしい、又無慚などいふと同言の轉用也。此事はむごいの條にて見るべし。又毛などの繁く生たるを、むざむざとはいへるなどいふは、應神紀に「芳草蒼蔚」萬葉二に「花つゝじ木丘開道乎」續紀詔詞に「牟俱佐加に」などある牟俱にて、さは手にざらざらと觸れさるよしの意也。

○むさばる 空穂物語、藤原の君「かくてふし給へるほどに、まうほる物日にたちばなひとつ云

○むざん 「むごい」を見よ。

○むし 双六の詞也。催馬樂、大芹に、むしかめの箇とあり。楚辭招魂に「些成梟而牟呼五白」注「王逸曰。倍勝爲牟。五白簿齒也云云」今も双六の駒をはこぶに、六まで二つづく並ぶをむしと云ひて勝とす。委しくは入綾に云り。

○むしけら 虫也 空穂としがけ「とらおほかみむしけらといへども、人のけちかきをあたりによせす」

○むじなのひるね たぬきね 猪のひるねといふことあり。和名抄云「說文云。貉音雀。漢語抄云。無之奈似孤而善睡者也」とあれば、よくねぶるものと見えたり。又虛寐を狸寐と云は、狸の人を欺く方より云なるべし。所によりては、蘆鹿の長寐ともひるねとも云。是もよく睡るもの也。又かの貉と狸と同物と心得たる人あれど別也。和名抄にも「狸兼名苑云。狸音釐。和名太奴木。搏鳥爲糧者也」とて、貉とは別に舉げたり。

○むしばむ 拾遺集、雜戀「うもれ木は中むしばむといふめればくめじのはしはこゝろしてゆけ」

○むしはらひ 虫掃 虫干 古老口實傳「常明寺勤役事。一切經虫掃無定日。禰宜寺僧等勤仕之七月」

○むしばし 「むしはらひ」を見よ。

○むしや 虫屋 新撰六帖、二、光後朝臣「すみなれしもの野はらやしのぶらんうつすむし屋にむしのわぶるは」

○むしろ 寧 めつた むせう めつたに大切な事を洩すな、めつたに人にいふな、又めつたの事をするなよなどいふめつたは、古語のもとを訛れる也。もとなどめつたと三言ながら、親しく相通ふ言とも也。万葉、二四十四丁「何しかもも」とないへる」三三十三丁「あすか川今もがもとな」四三十丁「もとなかくのみ戀へばいかにせん」又三

十一丁「白露のけぬがにもとなおもほゆるかも」又三十三丁「相念はぬ人をやもとな」又三十四丁「わびをる時になきつゝもとな」又四十九丁「かくばかりもとなし戀へば云云」此外八三十四丁、四十二丁五八丁、十六丁、十八丁、四十八丁、五十六丁、五十八丁、十二丁、廿三丁、十二七丁、十五丁、二十七丁、三十五丁、三十七丁、十三丁、十五丁、

○むすこ むすめ 生子、生女の義也。古事記、上に「高御產巢日神。神產巢日神」書紀、神代

上に「高皇產靈尊。神皇產靈尊」とありて「皇產靈此云美武湊鬼」あるもて、產生の意なる事明かなり。萬葉、一十四丁左「河上乃湯津磐村二草武左受云々」古今集、賀に「昔のむすまで」などよめり。寛平菊合、藤原重時「あはの守ひろしげがむすこがみて、きくともおはすべき」催馬樂、我門に「みそのふのあやめの郡の大りやうのまなむすめといへおとむすめとこそいはめ」後撰集卷上「しはすばかりに、やまとへことにつきてまかりけるほどに、やどりてはべりける人の家のむすめをおもひをかけて待けれどもやんごとなき事によりてまかりのぼりにけり云云」

元良親王御集「近江介なつきが娘ども、かたちよく心たかしと聞給ひて、つかはしける」元良親王御集昇の大納言の御むすめに住給ひける」

品宮の御捧物、わけざら、わけがひとも、みな結袋にて、造枝につけて藏人二人もたり」

○むしろ 小馬命婦集「きりざりすむしろいかにか思ふらんたみの中にあきは來にけり」席に寧をいひかけたり。

○むしろしく 空穂物語、藤原の君、舟一「あしすだれかけたり。おまし所、こゝの幅なるむしろしきたり」

○むしん 無心 源氏、玉かづら「いとむしんになして」

○むしろ 小馬命婦集「きりざりすむしろいかにか思ふらんたみの中にあきは來にけり」席に寧をいひかけたり。

○むしん 無心 源氏、玉かづら「いとむしんになして」

○むすめ 「むすこ」を見よ。

○むすびふくろ 菓花物語、廿七、衣珠卷「一

○むせう 「むしろ」を見よ。

○むせる 夫木抄、二、春、大江千里「山ふかみたちくるきりにむすればやなくうぐひすの聲のまわれるる」

○むだ もだ事 爲てかひなき事、又徒の意、又空の意を牟陀事ともいへり。万葉、三、三十、「默然居而」四、二十に「默然得不有者」又三十、「默毛有益呼」七、二十四、「默陀不有跡」十七、五十、「母太毛安良牟云云」此外いと多き詞也。此等の母太は直黙也などいふと同意に黙止の意なれど、又徒に空き意なるも、猶少からねば今の世の俚語は、此より出たる也。古事記、詞志比宮段に「押ニ退御琴」不控坐これも黙止ながら其意相近し。

○むだごと 默止てあるより出たる詞也。萬葉集三、三十二丁「もだしゐてさかしらするは」四、二十三丁「しかすがにもだもえあらすは」また三十三丁、十二、七丁に「もだもあらましを」などにあらん。此外八、四十五丁、十二十二丁、七二十四丁、十五十六丁、十七、三十丁、十三、二十三丁。むだの條参照。

○むつかしき 金葉集、戀下、大納言經信「蘆垣の隙なくかゝるものいのものむづかしくしげるわがこひ」夫木抄、夏、俊頼朝臣「くもはれぬ五月きぬらしたび衣むづかしまであましめりして」

○むつがたり 鳴長明百首「しづのめが山路をいづる聲すなり爪木の下にむづがたりして」夫木抄卅六、雜、前大納言隆季「もろともにけふぞ心はゆきにけるひとづてならぬむづがたりして」

○むづかる おむづかるなど、今も女の詞に多くいへり。蜻蛉日記上「この御方春宮の御親の如くしてさぶらひ給へば、參り給ひぬべし云々。よひまとひし給ふやうに聞ゆるを、ろなうむづかられたまはやとの給へば」源氏物語、帝木卷、汎江入楚「小兒のなくをもむづかると世俗にいふ。無與の體、いかる心見えたり」

○むつき 詞花集賀伊勢大輔「めづらしくけふたち初るつるのこは千世のむつきをかさぬべき哉」○むつごと 古今集、二十、俳諧「むつごともまだつきなくに明にけりいづらは秋の長してふよは」

○むつまじき 萬葉集、四、二十、「むつまじく、我をば思はず」
○むつまやか 新撰字鏡に「綱縷纏綿也。太志加爾。又牟豆萬也、加爾」

○むつものがたり 源氏物語、少女卷「なに、かへるむつものがたりをしけんと」隆信集、戀四「何となきむつがたりなど」源氏物語、若菜巻下「又人もさかざりし御中のむつものがたりに」鵠長明家集「しづの男が山路を出るおとすなり爪木の下にむつがたりして」

○むつゆび 駢拇 技指 和名抄に「駢拇を六指」とせるはいふかし。是は指の股なくて、一連になれるを云。六指は技指の字也。莊子、卷四「駢拇。駢拇枝指出乎性哉。而侈於德。附贊縣疣。出乎形哉。而侈於性。音義駢步田反。廣雅云。並也。李云。併也。拇指足大指也。司馬云。駢拇謂兄拇指連第二指也。崔云。諸指連大指也。技指如字。三蒼云。技指手有六指也。崔云。音歧謂指有歧也」

○むとく 無徳 無得 大鏡、六「今の入道殿、その年の五月十一日よりして世をしろしめし

○むにむさん 無二無三 法華經云「衆人之糟粕無二亦無三」大和物語云「いと二つなくめで」とあり。新後拾遺集、入道一品親王尊圓歌「春はたらゝ花とぞ思ふふたつなくみつなきものはこゝろなりけり」

○むね宗 山家集、下「家のかせむねとふくべき木のものは今ちりなんとおもふことは」同「神無月しぐれはるればあづまやのみねにぞ月はむねとすみける」

○むねあげ 棟上のとき大工の衣冠する事もふるき事也。玉葉「承安二年二月三日建春門院上棟大工東帶自取麻昇屋上」とあり。

○むねがはしる 古今集、説諧、小野小町「人に逢ふつきのなきには思ひおきてむねはしりひに心やけけり」

○むねんむしやう 無念無生 おもひばかり

なくてすることを、無念無生とも、又は無念無想とも云。白氏文集、廿八「北闕停朝簿。西方入社名。」

○むづせかい 無念是是無生

「會更見世尊。則能信此事。謙敬聞奉行。踊躍大歡喜」科注鈔云、「如潞州云。言值佛者。一者值生身佛。聽聞正法。名爲值佛。二者有佛教法從他聽聞亦名值佛。雖有佛教無人傳說名無佛也」

○むふんべつ 無分別

法華經云「說無分別法」

○むへんほふかい 無邊法界

めつさうかい 八雲御抄などに、むへんほうか

めつぼうかい めつぼうかいの歌よみといふことあり。今の俗言に、めつさうかいといふは、此言の訛れる也。めつさうかいを伊勢にては、めつぼうかいといへり。又其意を江戸などにては、あてこどもないといへり。これも無邊法界の意に近しといへり。これは宣長の説也。

○ひめうのさけにゑふ 無明の酒に醉 祕藏

寶鑰云「徒縛妄想之繩。空醉無明之酒。」

○むやく 無益 後漢書、六十七、楊王孫「夫なきては、あてこどもないといへり。これも無邊

法界の意に近しといへり。これは宣長の説也。

○むらかせ 惠慶法師集「風のおとのたかきを

ききて「ひらの山もみぢよのまはいかならんみねのむらかせうちしきりふく」

○むらさきのあけをうばふ 紫の朱を奪ふ 後漢書、光武十王濟南安王康傳「今奴婢廄馬。皆有千餘。增無用之口。以自贊食云云」

○むら 紫原清正集「むらながらみゆる紅葉は神無月まだ山風のたぬなりけり」

○むらかせ 惠慶法師集「風のおとのたかきを

ききて「ひらの山もみぢよのまはいかならんみねのむらかせうちしきりふく」

○むらさきのあけをうばふ 紫の朱を奪ふ 上古の紫色と云は、乃ち朱色の濃き者にして、後世

者北紫也」と記せり。又紅は説文に、帛赤白色と注し、字彙には赤色と注し、釋名には色似縫者也と云ふ。朱子の説には、白を合して紅を成すと見ゆ。

通雅にも「紅色赤而白。此則謂之水紅耳」とあり。さらば紅といふは、今の桃花色なり「朱といふはすべてあかき色の總名にして。赤の濃を紫といひうすきを紅とこころ得てよし。」

めノ部

○め 質めて云ふめ也。太秦牛祭之文に「僧坊乃中仁忍入天物取留世古盜人女」源平盛衰記、十八

云「龍王め龍王めとも申侍る也」同、同「第八外海の小龍めら、四大海水の八大龍王に仰付てなく成すべれとて喰りける」同、同「梶取めらをすかし負せたり」同、廿九「その信救めいかにもして打殺せよ」

○め 外 源順集、應和十二年、前朱雀院の歌奉らせ給ふ歌、青柳「露をおもみたえぬばかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらん」

○めあはす 見あはす 今俗に男女配偶する事通に「古之朱汁染之紫與朱實相類。今之淺紫色近縫謂之北紫。以白色或藍爲初染地。其染之以紫紗色近玄。昔之紫近縫亂朱加以紅花成之。惡奪朱者謂淺紫色艶也。六書故曰。宋仁宗時有紫帕爲油所瀆。其色竊玄。因命染人放而爲之。謂之油紫。今四品以上朝服用之。其染之以紫紗色近玄。昔之紫近縫亂朱

厚葬誠無益於死者」古今集、誹諧「われを思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ」堀川百首、思、俊頼「むやひするかまのをなはのたえばかりの友ぶねゆきもわかれめ」林葉集、一「花ゆふけふかな」山家集、下「みなと川とまに雪ふく友船はむやひつこそよをあかしけれ」

○むやひ 古今集、誹諧「われを思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ」堀川百首、思、俊頼「むやひするかまのをなはのたえばかりの友ぶねゆきもわかれめ」林葉集、一「花ゆふけふかな」山家集、下「みなと川とまに雪ふく友船はむやひつこそよをあかしけれ」

○むら 紫原清正集「むらながらみゆる紅葉は神無月まだ山風のたぬなりけり」

○むら 惠慶法師集「風のおとのたかきを

ききて「ひらの山もみぢよのまはいかならんみねのむらかせうちしきりふく」

○むらさきのあけをうばふ 紫の朱を奪ふ 上古の紫色と云は、乃ち朱色の濃き者にして、後世

の絶色、絢色などと稱するものが、皆上古の紫色なり。今世に圖畫する所の、梵僧達磨が遍肩に被たる緑色衣は、即ち梁の武帝が贈りたる紫衣なり。又

を見あはすと云は、めあはす也。さてかのめるとといふを娶の字のごとく、女を取意とする時は、此あはすも家のむすこに女を合する意とすべきか。されど是は目をあはすよしならん。そは文選にも「滿堂美人獨與余目成目」とある如く、男女おもひある時は、目を以て心を通はせば也。

○めいごん　名言　晋書、山濤傳「濤與盧飲。論用兵之本。帝稱之曰。天下名言也」

○めいじん　これは昔もいへる詞なれども、今云とは少しかはれり。今世に、一藝一能に堪たるを名人と云。昔は世に其名の高く聞ゆるを以て名人とはいへり。沙石集三上「泰時この御心を不便に思はければ、自然に観所はしも有ば申あつべしとて、我内に置て、衣食の二事思ひあてられけり。名人なるをかたらひて、相すみけるが云々」同上「故吉水の慈鎮和尚の御房に房官有けり。又御室の御所にも房官有けり。げに名人なりけるが」呂覽四孟夏紀勸學「聖人生於疾學。不疾學而能爲魁士名人者。未之嘗有也」羅隱詩「右曹官重得名人」司空圖詩「有名人易困。無契價難還」蘇軾詩「元亮本無適俗韻。孝章

二年云々。神はなる、に祈禱を先とし、冥は加ふるに正直をもて本とす」慈恩傳、一「然始入塔。啓請申其心志。願乞衆聖冥加使往還無梗」

○めうじ　苗字　玉勝間、卷二下「藤原源などは、世に同じ氏の人數しらずおほかれば、その内を苗字して分されば、いと紛らはしきまゝに、常に其苗字をのみよびならひて、むねとなれる、これお姓の如くなれりければ、姓のしられざらん人などは苗字を正く守るべきわざなりかし。さてこの苗字の苗字は、よしなきこと也。こはもと名字なりけむを然書ては、名又あざなとまぎる、故に、かきかへたるものなるべし。名字とかゝんもあたれるにはあらざれども、中昔には名をも又姓と名とをつらねても、ひろく常に名字といひれば、姓の小分をも、同く然いひならへりし也。又今の人おのが子のことをも、父の事をも同苗といふ。これもと同名にて同姓のよしなり」

○めうつり　陸信集、下「めづらしきやへうの花のめうつりにこゝろもひかぬあやめ草哉」増鏡、今

要是有名人」　○めいぶく　名物　産衣の鎧（源平盛衰記十六十四）骨食の太刀（同上）雷上動の弓（同上）水破兵破の矢（同上）獅子王の劍（同々、十六）唐皮の鎧（同四十一）小鳥の太刀（同上）八龍の甲（同四十

二十二）

○めいぼく　榮花物語、花山、卅七「御めいぼくもめでたくて」空穗物語、初秋「かへりてめいぼくありと昔よりきこしめしかけて、つにとはせ給ふ」源氏物語、乙女「おしのごひ給をみる、御師の心ちうれしくめいぼくありと思へり」同、同「我家までにはほひこねど、めいぼくにおぼすに云々」同、玉鬘「ことおこなふ身となれるは、いみじきめいぼくと思へり云々」同、楓木柱「今までみこたちのおはせぬなげきをみ奉るに、いかにめいぼくあらましと」

○めいわく　迷惑　後漢書十七馮異傳「當兵革始起擾攘之時、豪傑競逐、迷惑千數。臣以遭遇託身聖明云々」

○めうが　冥加　神皇正統記ニ「雄略天皇廿

日の日影「さばかりいみじからし院の御目うつりにこよなの契の程やとおばししらるゝもつられれば」○めがくし　屋根ノめがくし也　今物語「雲居のほどを過られけるに、瞻西上人の家をふきけるをみて、難色を使にてひじりの屋をば、めかくしにふけといはせて」

○めがくる　扶木抄、廿、雜、前大僧正隆辨「めにかけていくかになりぬあづまちやみくにをさかふふじの柴山」

○めかけ　めしうど　妾　權の北のかた　○めかけ　めしうど　妾　權の北のかた　芭花物語、花山、廿二「權のきたのかたにてめでたし」今昔物語、十一廿「般若寺の觀賢僧正と云ふ人權の長者にてありける」増鏡、今日の日影「新陽明門院をはじめ奉りて、いろいろの御召人ども、廊の御方、讚岐の二位殿など」大和物語「守のめしうどにてありけるを、この妻のせうとの在次君は、忍びてすむになんありける」芭花物語、様々の悦「大殿年比やもめにておはしませば、御めしうどの典侍のおはえ年月にそへて」源氏物語、蝴蝶「宮（鎌兵部卿也）はひとりものし給ふやうなれど、人がらいと

いたうあだめいて、かよひ給ふ所あまたきこえ、めしうどとか、にくげなるなりする人どもなん、かすあまた聞ゆる」同、真木柱「御めしうどだちて、つかうまつりなれたるもの、君、中將のおもとなどいふ人々だに 云云

○めざしたら しだらうち 設樂擊 伊勢の御

神事にあり。手をたゝきて謳歌する事となん。此名目童遊にうつり、手をたゝきてうたうたふ戯を持遊といふなるべし。遊學往來 玄墓作「持遊」「無木」とある、

是なり。持は俗の弄の字にて、もてあそぶと訓字なれば、字義によりては解がたし。無木と云は撃壊の事なるべし。(無木は、十訓抄 壇壊抄等にみえて、无木賽の事なるを、撃壊の事と云はいかゞ) 東海道にてはもぎといふより、東國にてめづきといふは、めき也。つをしてつよくいふ也。むきといひ、もきといひ、めきといふ。

○如其形のちひさき木を地に立、おなじ形の木を持て打つくる戯也。唐にても古く有し事也。三才圖會「以木爲壊。前廣後銳。長一尺四寸。闊三寸。其形如履。臍節少童以爲戲將。戲先側ニ壤於地。遙於三四十步。以手中壊一摘之中者

爲上 此方東國にてめきといふ戯これに同じ。和漢同じ戯也。三才圖會に撃壊げたうちと假名つけたり。

○めくちはだかりて 目口はだかりて きもをつぶすさま也。今昔物語、十九八「女房達奇異に目口はだかりて思ゆる事限なし」同廿八「僧共此れを見て、目口口口て皆立去にけり」同廿八「奇異く目口開て居たり」源氏物語、乙女「宮けさうし給へる御かほの色たがひて、御めおほきになりぬ」落窓物語、三十五「目も口もはだかりぬ」

○めくはす 「めくばせ」を見よ。
○めくばせ めをかはす めをくはす めくはす めいぼく めくばせはめをかはす意なるべし。くはせとかはしと音通ひて、今もめくばせ

するとも、めをかはすともいへり。伊勢物語の歌に「世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよと

も頼まるゝかな」源氏物語、若菜「中務・中將の君などやうの人々、めをくはせつゝ、あまりなる御思ひやりかななどいふべし」落満物語「心得てはやる難色どもに、めをくはすれば走りよりて」源氏物語若菜「あなたたはらいたと、めくはすれど、聞えいれず云々」枕草子「かづきするあまの住家はそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん」(猶)かたちをやつす」を参照せよ。)

○めぐみ これはもと萬葉集、五丁に「父母を見ればたふとし、妻子見れば米具斯都久志」十八

六丁に「妻見波可奈之久米具之」などある、米具之と同意なるを、米具之といふ方は俗にむごいといふ意さてむごきに就てそれをあはれむ方より、めぐむといふになれるなり。則あはれをあはれむ、いとほしをいとしむ、といふ類也。十一丁に「懲久也君が戀にしにせん」といふに、懲の字を書たるにて知べきなり。

○めぐむ 芽萌

・林葉集、一、逢想夫同花「さ

そさかすさこそとふとも山人をめぐまん枝を折そへてくな

○盲のかべのぞき 維摩經云「如二盲者見色

○めざましぐさ 目覺し種 萬葉集、十二二十「あかときの目さまし草」何にても見て目をさますを云なれば、今云ともはら同じ。夫木抄、廿二、俊頗朝臣「おひしげるねぶりのもりの下にこそめざましぐさはう、ベカリけれ」

○めし 飯 拾遺集、雜上、藤原後生「むか

しわがをりしかづらのかひもなし月のはやしのめしにいらねば」はし書に「月林寺に云云」と有。驗に匙、召に飯をよせたり。

○めしあげ 大和物語「さまかたちもきよげなりければ、あはれがり給ひて、うへにめしあげ給ふ」後撰集、春下「延喜御時、殿上のをのこともの中にめしあげられて」續後撰、雜上「老の後はじめて召出されて云々」

○めしあづけ めしよせられ、其席にあづかりし也。伊勢物語、廿九「むかし東宮の女御の御かたの花の質に、めしあづけられけるに」

○めしうど 「めかけ」を見よ。

○めしつかひ 大和物語「北方うせ給ひて後、これかれある人をめしつかひ給ひなどするなかに」

同「つりどのゝ宮に、若狹のごといひける人をめし

たりけるが、又もめしなかりければ」源氏物語、末

つむ花「大輔の命婦とて云々。いといたういろこの

めるわが人めで有けるを、君もめしつかひなどし給

ふ」大鏡、三「又さぶらひける女房をめしつかひけ

るほどに、おのづからうまれ給へりける女君」

○めしつぎ 召次 竹取物語「たゞ舍人二人め

しつぎとして」源氏物語、宿木「めしつぎとねりなど

のなかには、みだりがはしきまで、いかめしくなん

有ける」李部王記「天暦二年十一月廿二日丁卯夜。

詣右丞相坊門家聚公中女。中略召繼以下錢二萬」同西

宮抄、院宮雜事中「御隨身勤夜行召繼奏時云々」今

案、親王家又有召繼。式部卿重明親王嫁娶之時、召繼

以下錢二萬を錄に給ひしよし、上記李部にみえたり。

増鏡、老のなみ「殿上人、北面、召次など」と美々

しうて參り給へり」榮花物語、初花卷「めしつぎど

もはもとの俗ども仕うまつれり」同、殿上花見「お

なじ色の柏着たるめしつぎといふもの十人つき

り」同、ゆふしで「御隨身所、めしつぎ所數しらず」

○めしつば 飯粒は古く伊比須と訓り。古事記

詞志比宮段に「以飯粒爲餌釣其河之年魚」土佐

日記に「いひばをしてなつるとや」安閑紀に、飯粒

と云人の名も見ゆ。

○めす 着 しのびね、下「したにめし給へるあやの御ぞ」

○めつさうかい 「むへんほふかい」を見よ。

○めつた 「むしろ」を見よ。

○めつぼうかい 「むへんほふかい」を見よ。

○めづらしき 珍敷 珍愛る方より出で、希

見方にも相兼て用ひならへり。萬葉集二三十「五月

之益目頬染所念之君與時々」同三十三「春草之益目頬

四寸吾於富吉美可母」同十一左「希將見君乎見常

衣」又二十「益希將見裳」續紀の宣命に、希見良可、新

伎などもいへり。貫之集、四「春たばさかばと

眼の時なれば

○めとる をとこの妻をよぶをめとるといふは妻の字の如く女を取よしなり。

○めにあく 古今集物名僧正聖寶「はなのなかめにあくやとて分ゆけばこゝろぞともにちりぬべらなる」

○めにちりのいりたるとてする 宇治大納言物語、落本「御てにてめにちりの入たるとてすり給ふ涙をまざらすさまなり。

○めにつく 目につく 萬葉、一十三「さ野榛の衣につくなす目につくわがせ」藤原元真集「めにつくはすくなかりけり女郎花あまたおほかるさが野なれども」

○めにもかたへ子にもかたへ 空穂物語、忠こそ「たゞこそを妻にもかたへ子にもかたへと、たのみおぼしてなでやしなひ給ふ程に」

○めぬき 目貫 神樂取物の劍の歌に「しろがねのめぬきの太刀をさげはきてならの都をねるはたが子ぞ」空穂物語に、こがねの目貫といへり。嵯

峨野物語に「目貫を限りにたゞかへども」といへる

○めど 「けづりかけ」を見よ。

○めとづる 今死ぬる事を目をねぶると云に同じ。愚管抄、四「今の世は君の御眼、どちらはしましり。今按に國柄人が朝庭に參上て高く笑ひけるも、往古よりかかる風俗なる故なるべし。

と、太平記劍卷とを合せみれば、古へは目貫を重みせし也。さる故に、今の世の言に、物の肝要なるを其所が目貫、こゝが目貫などいへる詞のある也。源平盛衰記に「目貫の釘」「目貫の穴」などもいへり。

大神宮式に「鑰の下、柄の中に花形の目拔在」と書るは、穴をいふなるべし。されどもとは鐵柱を穴へ貫きしをもて目貫といふ名とはなれるにこそ。又云今刀劍の裝飾の具に目貫といふもの有。これ目貫にはあらず。實は目釘穴をさへなり。延喜式に、鮒形とあるが今云目貫の事なり。同書に目貫と有は、目釘穴の事也。故に今之目貫と云は、目釘穴押へなるべし。官家には鮒形と稱し玉へり。其鮒形を以て高下を分つ爲に、貞觀式に「三位以上は金の船形、四位以下は銀の舟形、六位以下无官の者は赤銅からかねの舟形を用ゆ」と見えたり。然れども今は花麗になりて、鮒形にはせず、家々の定紋など付らる。

又しとやめなどの事は、唐の古今刀劍錄に委く、壺井氏日本古今刀劍錄を編れたり。これらに委しく有。按に、おのれも弱冠の頃より、此目貫は目釘押にて有べしとおもひしが、後此説を見て、愚意と

符合せり。故に今目釘押へに用ひんとすれば、柄をはなす度ごとに、柄糸をとかざる事を得ざるによりて、費用に苦しむ故に、別に革を細くして目釘穴に通して、其革にて目釘を柄に縫め置なり。これ目釘をはしらしめざる武備なり。官家にて後世鮒形などを定紋などにしかへ玉ふも、皆同じ制の太刀なる故に、これを分つ爲の定紋なるべし。

○めのと うば 頭乳人 和名抄云「乳母。和名米乃止。辨色立成云。嫗母和名知於毛」とあり。

米乃止の意は同抄に「言心妻妹也。事見『彼書』」とあり。おちの人は御乳の人なるべし。うばとは姥のよし也。老女ならぬと兒よりは然かよぶべき也。落窪物語、「之下」「めの」となる人こそにはかに切めしか云々」同、「乳母なる人こそ殿なる人を知りて云々」

○めのまへ 目の前 公忠朝臣集「から衣ぬぎさてがたみ我やさんたゞめのまへにかけてこそみめ」

○めばやさ 目明 阿佛轉寢「めばやき山がつもやとつゝましながら」

すといふ。又樂の音のゆるぶをもおめるといふ。
○めをうちたゝきて 今昔物語、廿七五「可死氣なる縛り被付て、目を打叩て有」

○めをかはす 「めくばせ」を見よ。
○めをきはむる 曾禰好忠集、五月はて「あかねさす岩戸の山もみえぬべくめをきはめてもてれる夏哉」

○めをこやす よきものを見るをめをこやすといふ。今も昔もおなじこと也。更級日記、泊瀬詣の所「門ひろうおしあけて、ひとぐたてるが、あはれ物詣人なめりな。月日しもこそ、世におはかれと笑ふなるに、いかなる心ある人にか、一時の目をこやして、なにかはせん。いみじくおぼしたちて、佛の御驗かならず見給ふべき人にこそあめれと」

○めをみる 「みくをきく」を見よ。

○めんかた 一面形 今昔物語、三十五「舞人は多好茂也。面形を取去ては人も見知と思ければ、面形を爲乍ら」

○めひ 「をひ」を見よ。
○めもあはせぬ 曾禰好忠集、十一月をはり「けをさむみさえ行冬の終夜めだにもあはず衣うすれせ」
○めりめり 物の火に燃るにもいひ、又めりめりと引裂などいふ。竹取物語「火の中にうちくべてやかせ給ふにめりめりとやけぬ」
○める へる おめおめすな 米などを春てめりが立といふは、減といふに普通へり。又いふかいなきもの、人中へ出て、おち恐れたる時に、おめおめすなどといへり。沙石集、「東大寺の石ひじり經住が、我れは觀音の化身なりと名のれども人信せぬまゝに、おびたゞしく誓状するを、或人觀音の化身と名のるを人信せば、神通なんどを現じて見せよかし、誓状こそ無下におめたれといひければあまりに久しく現せて、神通も忘れて侍るものと云けるこそ、思ひ合せられてをかしくこそ」同、三下「よし／＼よくしたり、児どもはそれでいて、おめぬがよきぞと」これらは今いふに同じ。裝束抄に、薄枚重ねなどの、次第にしさらするをも、おめらか

牝鷄之 アシタハハシノ 晨 アシタハハシノ 惟家之 ワカルナリ 索

○めんつう 此器古へは聞えず。應仁の比よりものに見ゆ。其比はめんつといへり。奇談雜談集一

「水の飲度よし申ほどに、おりて井を尋ね、めんつに汲て、天井に上りてあたふ。女人水をのみ悦び、御僧はまづ御下り有て火を御消し候へといふ」

○めんばれ おもてぶせといふ詞の反にて、俗に面晴、又面目をおこすといふにあたれり。仲文集

堀川の中宮うせさせ給つる頃の贈答に「あが佛かはくらべよ極樂のむろておこしはわれのみぞせん」蜻蛉日記にも此詞見ゆ。

○もうしゆうもうをひく 中務内侍日記「御たづねありしにめんめんに」岩清水物語「めんめんにいとまこひて」

も シ ノ 部

○もうしゆうもうをひく 一言衆言をひく 大知

度論云「譬如一盲無見千盲俱爾」無門關云「捨身能捨命一見引衆盲」

○もがく 「あがく」を見よ。

○もがさ 鞠瘞は面瘞の略歟。又喪瘞歟。喪を忌て、今は鞠瘞と音にのみいふにや。契沖説。

○もぎき 「もぐ」を見よ。

○もぐ もぎ木 源順集「源といふ人にもあらず、千種に匂ふ花のあたりには、もぎ木のやうに

てまじりにくく侍れども、やんごとなくさぶらふべきみやまのふもとより、おひ出たる草のゆかりにて、仰ごとのいなびがたさに、みづぐきして書するして

奉りおく、其歌ども、順朝臣さだめ申さる處かくな廿、雜、俊賴朝臣「われといへばあたごの山にしをりするもぎ木の枝のなきなのよや」源氏物語、竹河「よそにてはもぎ木なりとやさだむらんしたに匂へる梅の初花」文選、長笛賦、馬季長「逮乎其上。匍匐伐取撲切地燒截本末規摹護」注李善曰「鄭玄毛詩箋

曰。掩支落之」

○もぐら 黙名 もぐらもち 蹤鼠を、もぐらとも、もぐらもちとも云は、うごろもちの轉語なる

べし。和名抄云「本草云。鼈鼠。和名字古呂毛知。文字くさりとは、即歌の事なり。

○もじなぞ 十訓抄云「嵯峨帝、「一伏三仰不來待。晝暗降雨戀筒寢」と書せたまひて、こ

れをよめとて給ひければ、小野篁よみ奉る「月夜にはこの人またるかきくらしあめもふらなむこひつゝもねむ」これはわらはべのうつむきさいといふ

ものに、ひとつふして三あふのけるを、つきよといふなり。(此うた古今集には、よみ人しらずとありて「わびつゝもねん」と見えた。能因が立々集云「中

通俗文云。糞鼠一名_{冥冥}猪音兼名苑注云。恒在土中一行。若見三光即死。○もぐらもち 「もぐら」を見よ。○もぐらもく 目錄 菜花物語、初花卷に「物のかずかきたるふみ、柳管にいれて參れり云々」此かずかき今世の目錄書也。○もじぐさり 文字鎖 袋草子「連歌ハ本來只任意詠之。雖然至鉢連歌發句ハ專不可詠。末句又如然之時任口早速ニ不可發」夫木抄、九、蟬「建保二年六月文字鎖廿首」著聞集、五、弘徽殿女御歌合に「花からしら田ゆみといへる文字ぐさりを、歌句の上にすゑて、折句の上によませらるける」續世繼物語、八、花のあるじ、十丁「名だかき女うたよみ、家の女房にてあるに、きんだちまゐりては、くさり、れんがなどいふこと、つねにせらるゝに、三條のうちのおとゝの、まだ四位少將などのほどにやふきぞわづらふしづのさゝやを」と、し給ひたりけるに、中務少輔實重といふもの、つねにかやうの事にめし出さるゝものにて「月はもれしぐれはとまれとおもふには」とつけたりければ、いとよくつけた

づかさが歌に「うらめしくかへりけるかな月夜には
こぬ人をだにまつとこそきけ」和歌用言集真觀坊が
うたに「人をこそまたてもあらめくもれとはいか
おもはむ秋の夜の月」後鳥羽院御集に「月夜にはこ
ぬ人まつといとへどもくもるさへこそねられざりけ
れ」各此意をよみし歌也)古今著聞集云「大二條殿
小式部内侍がもとへ、月といふ字を書いてつかはされ
たりければ、小式部月の下に、をといふ字ばかりを
書いてまあらせたり。月といふ文字は、よさりまつべ
し、出よとなり。又人のめすには、男はよとまつし
女はをと申故に、小式部をとこたへて、その夜まつ
りたり」とあり。卓氏藻林云「月出男女相悦而
想念之詞」とあり、異域同談なり。

○もたごと 「むた」を見よ。
○もたひ 新撰存鏡に「璣鱗庭三字毛太比」
○もだえ 空穂物語、忠こそ「おとゞおどろき
もだえ給ひて」
○もちづき 望月 竹取物語「家のあたり、
ひるのあかさにもすぎてひかりたり。もち月のあか
さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛のあなさ
ん」

○もつかう 木瓜 天野信景筆記云「枕草紙
に「もやのみすのもかうと云々」もかうは簾負にて
帽額の音の轉せるなり。布のもかうは、倚廬の御所
に、布のみづひきを引侍るなり云々」定基公御説云
「もかうとは、能相模などの舞臺の上に引物なり。
世俗には水引と云。帽額と書て額かくしなり。金襴
などにしてしたるを、金襴もかうといひ、白絹に獅子
など書たるを、獸形帽額と云。此もかうを當世水引
といふは誤りなり。上に張をもかうといひ、下に張
るが水引といふと云々」獸形帽額ハ紫宸殿大禮之時
壁代上引云也。
○もつとも 竹取物語「中納言よろこび給ひて、をかしき事にも
あるかな。もつともえしらざりけり」
○もてあつかふ 新撰六帖、六、光俊朝臣「山

○もちまうけたる 山家集「しらなはに小鮎ひ
かれてくだるせにも、ちまうけたるこめのしきあみ」
○もつ 持 藤原爲忠朝臣集「秋かせはいか
におもへばかるかやのもちける露をふきはらふら
ん」

○もつまうけたる 山家集「しらなはに小鮎ひ
かれてくだるせにも、ちまうけたるこめのしきあみ」
○もつかう 木瓜 天野信景筆記云「枕草紙
に「もやのみすのもかうと云々」もかうは簾負にて
帽額の音の轉せるなり。布のもかうは、倚廬の御所
に、布のみづひきを引侍るなり云々」定基公御説云
「もかうとは、能相模などの舞臺の上に引物なり。
世俗には水引と云。帽額と書て額かくしなり。金襴
などにしてしたるを、金襴もかうといひ、白絹に獅子
など書たるを、獸形帽額と云。此もかうを當世水引
といふは誤りなり。上に張をもかうといひ、下に張
るが水引といふと云々」獸形帽額ハ紫宸殿大禮之時
壁代上引云也。
○もつとも 竹取物語「中納言よろこび給ひて、をかしき事にも
あるかな。もつともえしらざりけり」
○もてあつかふ 新撰六帖、六、光俊朝臣「山

へ見ゆるほどなり」新撰存鏡に「羊蹄躅、毛知豆、自
とあり。花にねばりけ有て、山中の童は此花を探て
くらぶ。

○もちひのかみ 保憲女集、詞「かげもうか
ばぬもちひのかみとして」濱松、四「大將ひざに
すゑてかいなでつゝ、もちひかみみせ奉り給ひて
こちたういはひ給ふ」源氏物語初音はがためのいは
ひして、もちひかみをさへとりよせて」

○もちひらる 落葉物語、一之上「人にも用
ひらんものぞとのたまへば云々」
○もちふ 持夫 拾玉、四七「奈良よりと聞
ゆるうりを大和路やいかで持夫にすこしゆるさん」
狹衣、一上十一「古本「戀のもちふをば云々」清輔集
「四位の後、荷前の使にもよほされければ「あまた
たびなびきて前に過にしをしむのもちふにわれをお
もへる」

○もてなす 挨拶應などつゝけて口語にも多
く用ひへり。人をそらさずもてはやす類の詞也。源氏
物語、桐壇「人のそしりをもえはからせ給はず。世
のためしにもなりぬべき御もてなしなり」拾玉集、
三左大將家六百番歌合、夕顔「しづのをが片岡しめ
てすむ君をもてなすものは夕顔の花」十訓抄三「小
野小町が若くて色を好みし時、もてなされし有さま
ならびなかりけり」徒然草七十八段「今様の事どもの
めづらしきをいひひろめ、もてなすこと、またうけ
られね」同、上百十九段「鎌倉の海に、鰯魚といふ魚は
かのさかひにはさうなき物にて、此ごろもてなすも
きどきくものかゝること月をもてなすけしき也け
れ」

○もてなやむ 夫木抄、十三、秋、貫之「ひと
へ見ゆるほどなり」新撰存鏡に「羊蹄躅、毛知豆、自
とあり。花にねばりけ有て、山中の童は此花を探て
くらぶ。

ちしも秋にあかなく世中のかなしき事をもてなやむ
らん

○もてはやす

後撰集秋下「なに、さく色をめかへしにはふらん花もてはやす君もこなく」萬葉、十六三十長歌の結に「時賞毛時賞毛」これは雅俗ともにかはる事もなければ、物も引ざる也。

○もどかし 語源は欲戻の意にて、轉じて我心のまゝならず、心いられのするをいふ。又もどく

すなども云。雅語もおなじ意にいへり。拾遺集、戀二、題しらず、よみ人しらず「われながらさるものかしきこゝろかなおもはぬ人はなにか戀しき」後拾

遺集、戀二、増基遠江記行に七夕を「七夕をもどかしと見しわが身しもはてはあひみるためしとぞ成る」堀川院後百首、忠房「もどかしとたなばたつめ

や思ふらんあはぬとしなきおのがならひに」千載集恋、平實重「人のうへとおもはいいかにもどかまし

つらきもしらすこふるこゝろを」拾遺と千載同意。遠江記行、堀川後百首と同意也。千載集戀、三、顯輔「よそにしてもどきし人にいつしかと袖のしづくをとはるべきかな」後拾遺集、好忠「あぢきなし我

身にまさらる物やあると戀せし人をもどきし物を「空穂物語、としがけ「此七とせになる子、父をもどきて、

こまうどと文をつくりかはしければ云々」蜻蛉日記四中「かたちことにも、京にある人こそはとおもへど、それなんいともどかしう見ることなれば、か

くおもふといへばいらへもせで、さくりもよゝとなく。さて五日ばかりにきよまはりぬれば、堂にのぼりぬ」

○もとしの 本しの 堀川院御時百首、阿闍梨隆源「冬寒み末の枯葉も落はて、本しのばかりたる芦かな」

○もとだら 木立をもとだらと云は、古言の遺れる也。古事記上卷、神武御歌に「曾泥賀殿登」とあるは其根之莖なり。大祓詞に「繁木本乎」孝德紀

歌に「模勝渠等爾波那橋左該勝模なにとかもうつくし妹が又咲出こぬ」萬葉、十四「おふしもと木もと山の」などよめる是也。田舎のみならず、なべての

詞にも、一木二木と云ことを、一もと、二もとなどいふも、即もとは木の事也。

○もとになしかぬる 商人の諺なり。百縁經云

「むかしある者海にいりて、沈木を取、數年を経て車一つにつみて、市にいで、うるに、其値をたかくいふゆゑに、數日になれども買ものなし。おそらく

るゝをくるしむといへども、やすくうるべきこゝろはなし。かかる所に、人の炭をうるを見れば、もち出るとひとしくうりて歸るていなり。かのもの思ひけるは、さてもよき事を見得たり。われも此沈を炭にやきて、はやくうらばやとて、家に歸り炭にやきもち出てうるに、すみやかにうれしかども、其値きはめて少く、後悔することかぎりなし」とあり。はじめより沈を賤くうらば、半分のあたひをも得べきに、しきりに貴くの、しりて、はては炭に焼て、十分が一の價を得ざりけるとなり。

○もどる 夫木抄、卅六、雜、俊頬朝臣「つくもぶねうちみをつみてもどるにはあしやにねてもしちねをぞする」

○もなか 最中 拾遺、員外上「秋の夜のか

げかたぶきの望月のとまりはうらの、もな、かなりけり」公忠朝臣集「池水のもなかにいで、あそぶいをの數さへみゆる秋のよの月」玉勝聞、卷四「歌は詞をえらぶべき事。童蒙抄に「水のおもにてる月なみと見ゆ。今世のまだしき人は、八月十五夜を秋のもなかと思えけるより、月の歌にともすればもなかとよめるを、時の人、和歌の詞とおばえすと難じけるが、歌がらのよければ、えらびにいれりとあり」と見ゆ。今世のまだしき人は、八月十五夜を秋のもなかと思えけるより、月の歌にともすればもなかとよめるが多かるこそ、かたはらいたけれ、物の眞中は雅語には眞中とこそいへ、毛奈加と云ことはあらず。かの順ぬしの歌は、水の面といふより、月次を波にいひよせ、波と云より仲秋の眞中を藻に兼て、藻中といひなせるは、言ひ係言なるゆゑに、わざとしひられたる也。尤巧にして、上下の應じ凡て兩吟のさまたゝならず聞えたる、それだに時人のうけざりしは、毛那加といふ言の俗びたりし故也かへるを水中の藻によせたる所もなく、打まかせて然かいはんはいかに卑しからん。最中の字の意とさへ心得たるいよ、拙し。

○ものいひ 拾遺集、雜、秋、僧正遍昭「こゝにしもなにはふらんをみなへし人のものいひさがにくき世に」

○ものいふ 言問をものいふと云事いと古し。古事記、穴穂宮段に「宇多豆物云王子」萬葉、十四三子に「毛乃伊波受伎爾豆云々」十六丁に「物不言先爾」などあり。今世にしてはなかなかに物知れる人はいふとのみいへるを、賤き者はものいふと云ふぞ雅語のまゝなる。又問事をもの申すといふは、いと後迄も云つたへたり。賴政卿集「めづらしき春につしか打とけて先ものいふは雪のした水」

○ものいり 空穂物語、藤原の君、四十一「大將とのものいりげなる殿なめり。白きよね二百石かけん。つくらせよとの給ふ」

○ものうらやみ 萬代、戀一「七月七日人にたまはせける、延喜御製「天つほしゆきがふ秋の夕ぐれに物うらやみもせられぬるかな」

○ものおそろしき 曽禰好忠集、四月をはう「日くるれば下ばこぐらき木のもの物おそろしき夏の夕ぐれ」

○ものがくし ものつゝみをする也。しのびね下「ものかくしするはつみふかうなる物を」源氏物語、浮舟「ものかくしはなぞといふ」

○ものかげ 萬代、戀四、前大納言基良「さても又いかなるよはの月かけにうきものかげをさせひそめけん」

○ものかぞへ 中務内侍日記「くるれば、遊女が舟ども、歌うたひ物かぞへなどするもをかし」

○ものがたり 物語 神代紀、下「是談」萬葉、七二十一「あふみあがたの物語せん」

○ものぐさき 落雀物語、一之下「物ぐさき部家にふして」拾遺集、雜下、惠慶法師「たねなくてなき物草はおひにけりまくでふことはあらじとぞおもふ」

○ものぐるひ水こばさず 淮南子云「狂馬不觸木。猶狗不自投於河。雖蠻蟲而不自陷。又況人乎」

○ものげなき 物氣無 源氏物語、少女「おとゞはさこそものげなきほど、見聞ゆれど同、夕霧わがとしのほどくらゐなどかく物げなからずば」

○ものとがめ 榊葉日記「さしたる事もなきものとがめをし」

○ものぐ 物具 調度といふにおなじ。後拾遺集、雜二「年頃住侍ける女を、男おもひはなれてもの、具などはこび侍ければ、女のよめる」大和物語「純友がさわざにあひて、家もやけほろび、物の具もみなとられはて」濱松中納言物語、四「あけくれよみ給ひし經、數珠、物の具はありながら」建禮門院右京太夫集、上一丁【高倉院の御位のころ、承安の四とせなどいひしとしにや、正月一日中宮の御かたへ、内の上わたらせ給へりし御ひきなほしの御すがた、宮の御ものぐめしたりし御さまなどの、いつと申ながらめもあやに見えさせ給しを、ものぐとほりより見まゐらせて、心に思ひし事「春の上にかかる月日のひかりみる身の契りさへうれしとぞおもふ」此ものぐは束帶の事也。

○ものたち 物裁 源氏物語、野分「ものたちなどするねひごたちおまへにあまたして」

○ものづき 靈憑、御產又御不例の時、物付の事有。源氏にヨリマシといへるに同じ。物のけを付る心なり。源平盛衰記、九「新大納言父子、並俊寛康頼はか靈共とて、御物付に移りて」續世繼物語、源氏のみやす所「ものづきのものうたせておさせ給へ

○ものゝさとし 源氏物語、薄雲「おほやけざまに物のさとしげく」築花物語、花山「あやしうものゝさとしなどし給ひて」狹衣物語「物のさとしことを、物とはせ給へば」築花物語後悔大將「ものゝ

は、やけといへり。空穂物語、祭使三十「いひけにいれて、さはやけのしるしてもきたり」拾遺集、物名「春風のけさはやければ鶯の花も衣もほころびにはり」と和名抄「黃菜俗云。王佐以、一云佐波夜介」後撰集、春歌中『春雨のふらばおもひのきえもせいで、歎きのめをもやすらん』といふなるうたの心ばへを、女にいひつかはしたりければ云々

○もやす

曾禰好忠集

十二月をはり「くゆり

つ、世に炭がまのけぶたきを吹つゝもやせ冬の山

風」「補」後撰集春「春雨のふればおもひのきえもせいでいとなげきの芽をもやすらん」これは、おもひの火にかけてもやすとよめるなり。

○ちやひ

夫木抄

六、春、俊成「かへる春け

ふの舟出はもやひせよ猶住よしの松かげにして

○もえくるに火つきやすし

易乾卦云「水流

○濕火就燥」是諺のこゝろに相あたれり。

○もゆる火に薪をそふ

普賢經云「讚歎邪見」
如火益薪、禪家龜鑑云「貧世浮名枉功勞形。
營求三世利業火加薪」

○もらふ

貰

新選字鏡に「餌寄食也。毛良

○もる

信明集

このゆるぎの磯「かせふけ

ば玉もりいだすしら浪のよせずともなきこゆるぎの

いそ」

○もる ほる 源順集『中の御門の家の南に中務すむ。六月まだ梅の枝につきたるを折て、北の家に送れる詞にいはく、このはまだかくなん殘たるとすなはち云心「ゐせきにはさはらず水のものにあへばまへの梅つも残らざりけり」南のかへし「いづみだにのこらずいかでもりにけんせきのふるくわくひものかぬに」ならびて北かへし「いづみにはあらぬまがきの島ちかみ波のこえつゝもるとこそき

け」南のかへし「うちこゆる波の音をばもらぬよりしまきの風ぞふきかへさまし」又北のかへし「花をこそ人やをるとてとがめしか數ならぬみは何にかはせん」

○もろこしの詩 やまとのうた 久安百首、定家「秋にたへぬことの葉のみぞいろに出るやまとのうたもろこしの詩も」

○もろみ 諸白 諸質也。酒を造るには、麴と飯とを合せて釀する也。その二つの汁に混たるを諸實と云。東雅、十二云「我國の俗、凡物の二なるをもろと云て、諸の字を借用ふ。みとは質也。凡物形あるを云。猶身といふが如し。古の時にもろみといひしは、汁と滓と二ツ相混せしを云」と有。こは今も同じこと也。和名抄云「醪。玉篇云。醪力刀反。漢語抄云。濁醪毛呂美。汁滓酒也」とあり。今清酒を諸白といふは、此醪の濁を掃去て、清くせしよしか。又諸は純一の意にて、全く白き意か、心得がたき唱へなり。

○もん 紋 通鑑集考、卷七十一に「晉の司馬氏が武具に牡丹花の紋をつけ、又梁の敬帝の朝に

比波牟」とあり、「俗言に物をもらふといふはこれ也。もの乞ふことをもらふといひ、乞食人を物もらひといひて、俗に貰とかく。貰は寛の意あり。ゆるぶるの心也。又漢書に、貰猶赦ともあれば、もとはそ

の乞もとむる時、人のゆるして得さする方より轉れるなるべし。後漢書十七岑彭傳「彭因言。韓韻。南陽大人。可以爲用。乃貰韻以爲鄧禹軍師云々」注「貰寛也」同、二十、祭遵傳「光武乃貰之。以爲刺姦將軍云々」注「貰猶赦也」

○もり出す 信明集、このゆるぎの磯「かせふけば玉もりいだすしら浪のよせずともなきこゆるぎのいそ」

○もる ほる 源順集『中の御門の家の南に中務すむ。六月まだ梅の枝につきたるを折て、北の家に送れる詞にいはく、このはまだかくなん殘たるとすなはち云心「ゐせきにはさはらず水のものにあへばまへの梅つも残らざりけり」南のかへし「いづみだにのこらずいかでもりにけんせきのふるくわくひものかぬに」ならびて北かへし「いづみにはあらぬまがきの島ちかみ波のこえつゝもるとこそき

は、すべて土民までも衣類に思ひくの家紋を定て附たるあり。されど少しの間に止たれば、人あまねくしらす」

○もんちやく 人の家にもつれる事のあるをもんちやくするといふは、摺着の字歟。此詞を昔の物

に多くいへれば也。應仁記、上「彼貞親等が分として、三職の家を分退し、畠山の家督の如く、又武勝の家を摺着す」

○もんど 主水をもんどともいふは、盥取を訛れる也。豐受宮儀式帳に「御水四毛比。御水六毛比」

催馬樂、飛鳥井歌に「あすかるにやどりはすべしがもよし御水も寒しみま草もよし」如此直に水をさ

してもひといへるは、飲料の時の詞にて、即水を酌器より轉れる也。書紀、武烈卷歌に「施摩暮比爾彌

逗佐倍母理」和名抄、瓦器類に「說文云。盤小孟也。字亦作椀。辨色立成云。末里俗云毛比」萬葉、四に

「片碗」大膳式に「片碗」などある皆水を盛器也。

○もんめ 夢 一もん目二文目の文はもと、専らいふ故、文目といふ字を作り出たり。卽文の中

に片假名のタの字を取て二合したる也。

○もんもう 文盲 蚊虹 長明無名抄、上
「或人云。基俊は俊頬をば、蚊虹の人とて、さはい
へども駒の道ゆくにてこそあらめといはれければ」

やノ部

○や屋 凡今平人の家に何屋何某と屋號を
稱する事は、至つて文雅なる事にして、胡論なる稱
號よりはまさり。此事足利家の時よりや始りづら
んか。康富記云「應正二十七年十二月七日春日祭也。
予依爲分配早朝南都下向。天蓋小路龜屋著之。
史員職行等同宿也」又康正元年十一月卅日メシ狀に

「綾小路大宮酒屋」ト云。又此記文中に往々魚屋、鰯
屋など云事見えたり。これより以前の記録には、い
まだ見當らず。或人の説に、孝德記に鹽屋鰯魚とい
ふ人見えたりと云。然れば、これは鹽屋といふ姓な
る也。かの後世の如き屋號にはあらざるなり。
○やい 今の俗人をよぶにやいといふは、やよ
を急語の音便に訛れる也。古今集、三、夏、三國の
町「やよやまで山ほど、きすことづてん我世中に住

みわびぬとよ」

○やいとう 燒跡のキを音便にて、イにかよはし
アを略して、ウをそへし也。又接に、焼所か。隆信
集、戀、六、「れいならぬこと有て、やいとうなどし
たるに」拾芥抄、下末「灸治穢者七日。居灸之人三日
云々」行阿假字遣「文覺法師が正治二年に、鎌倉の
將軍賴家朝臣に、返り事におくりたりし書にいはく
「あつきやいとうを、ねんじてやかせば、やまひい
え候也」といへる言あり。君とある人の、臣のいさ
めをうけいるべきだとへにいへる語也。今も中國の
邊にて、灸をやいとうといへる。これを見れば、久
しき時よりの詞也。

○やうきゆう 楊弓 二水記云「享祿三年二
月三日午時。參内有御楊弓」

○やうし むことり 十訓抄、卷十、四丁「高陽
院の姫君と申すは、鳥羽院の御むすめ、美福門院の
御腹なり。此みやの御とりごにて云々」江家次第廿
世二丁「執^ル舞^ル」と見え、其外物語等に出たる聲をとる、
よめをとるなどのとるといふもおなじかるべし。或
書云「古へは養子といへども皆同姓を以てす。全く